三水村遺跡発掘調査報告書　第１集

鐘　山　遺　跡

――緊急発掘調査報告書――

１９８４・３

三水村教育委員会
鐘山遺跡発掘調査会

三水村遺跡発掘調査報告書　第１集

鐘　山　遺　跡

―― 緊急発掘調査報告書 ――

１９８４・３

三水村教育委員会
鐘山遺跡発掘調査会

序

三水村の最南西に位置し北側は掘割られ国道18号線が走り南には鳥居川が輝いて流れているこの小高い水田地帯が埋蔵文化財緊急発掘調査事業として発掘調査された鐘山遺跡のあとである。

今度鐘山地区土地改良事業が実施されるにあたり急拠三水村は調査団を編成し地権者各位の御理解と御協力を得て発掘にとりかゝった。調査団長に富士里小学校教頭岩佐今朝人先生、調査員に百瀬忠幸、横山かよ子、三ツ井きみ子諸氏を委嘱し4月10日より4月28日までの19日間の予定で実施をした。調査員の皆様方には春まだ浅く五山よりふきおろす寒風の中献身的努力をいたゞき埋蔵文化財の発掘調査が終ることが出来ました。たゞたゞ感謝にたえません。

地方の時代が叫ばれ、ふるさと回帰運動が唱えられているとき百瀬忠幸調査主任の御努力により鐘山遺跡の発掘調査報告書が刊行されることになりました。感慨無量なるものがあります。

文化財に対する認識を深め三水村の歴史を探究するための一助となれば幸であります。

最後に鐘山遺跡発掘にあたり御指導をいたゞきました県文化課（県史刊行会）樋口昇一指導主事先生を始め調査員の皆様方村内外の皆様方の御労苦と御努力に重ねて心から謝意を申上げ序といたします。

昭和59年2月20日

三水村教育委員会

教育長　渋　沢　静　雄

例　言

1　本書は、鐘山地区耕作者組合が昭和58年度に実施した非補助土地改良事業に先立って、記録保存のため、三水村がった緊急発掘調査事業の報告書である。

2　整理作業分担は下記のとおりであり，原稿の執筆分担はその文末に氏名を記してある。

・整理復元作業　百瀬忠幸，三ッ井きみ子，横山かよこ

・全体図・遺構図の作成・トレス　百瀬忠幸，柴　　哲，山田敏明

・遺物実測・トレス　土器…土井義行，石器…鴫原靖彦，石川由美子，百瀬忠幸

・写真図版作成は百瀬忠幸があたった。

・写真撮影は，百瀬忠幸が担当した。

3　本書に掲げた遺構実測図等におけるレベルは海抜高を表し，方位は磁北を示す。

4　グリッドは任意の１点を基準点とし，その基準点を中心に磁北を南北の基線に，それと直交する東西のラインをもう一方の基線として，基準点から２ｍ間隔に設定した。

5　今回発掘された資料については，河野喜映・佐々木藤雄両氏の御教示・御指導を賜った。記してお礼申し上げる。

6　本書の編集は主として百瀬忠幸が行い，岩佐今朝人が総括した。

7　出土遺物および実測図等は，三水村教育委員会が一括して保管している。

目　　次

序
例　言
目　次
挿図目次
図版目次
第１章　発掘調査の経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査体制……1
　第３節　調査経過（調査日誌より）……2
第２章　遺跡の環境……4
　第１節　地理的環境……4
　第２節　歴史的環境……7
　第３節　村内の遺跡……8
第３章　発見された遺構と遺物……10
　第１節　層　序……13
　第２節　遺　構……13
　　１．土　壙……13
　　２．ピット群……17
　　３．配石遺構……20
　　４．性格不明の落ちこみ……26
　第３節　遺構外出土遺物……28
　　１．縄文時代の遺物……28
　　２．平安時代の遺物……29
　第４節　小　括……30
第４章　結　語……32

挿図目次

第１図　遺跡附近地形図……５
第２図　鐘山－鳥居川模式断面図……６
第３図　周辺遺跡分布図……９
第４図　鐘山遺跡発掘調査位置図……10
第５図　遺跡全体図・セクション図…11
第６図　遺物分布図……12
第７図　１号土壙……13
第８図　１号土壙出土石器……14
第９図　２・３号土壙……14
第10図　４号土壙……15
第11図　５号土壙……16
第12図　ピット群出土土器……17
第13図　ピット群……18
第14図　ピット群出土石器……19
第15図　ピット群出土銭貨……19
第16図　１号配石……20
第17図　１号配石出土土器……21
第18図　２号配石……21
第19図　２号配石配石部および掘り方…22
第20図　２号配石出土土器……23
第21図　２号配石出土石器(1)……24
第22図　２号配石出土石器(2)……25
第23図　性格不明の落ちこみ……26
第24図　性格不明の落ちこみ出土土器…27
第25図　遺構外出土土器(1)……28
第26図　遺構外出土石器……29
第27図　遺構外出土土器(2)……29
第28図　遺構外出土鉄製品……29
第29図　遺構外出土銭貨……29

図版目次

図版１　鐘山遺跡の空撮
図版２　鐘山遺跡（上：遠景 南から、下：近景 北から）
図版３　１～３号土壙及びピット群（上：北から、下：西から）
図版４　４　号　土　壙
図版５　上：炭化米・銭貨出土状態、下：１号配石
図版６　２　号　配　石
図版７　２　号　配　石
図版８　鐘山遺跡出土遺物－１（１：３，４～６・12は１：２）
図版９　鐘山遺跡出土遺物－２（１：３）
図版10　鐘山遺跡出土遺物－３（１：４，２～８は１：２）
図版11　鐘山遺跡出土遺物－４（１：４，銭貨は１：１）
図版12　上：調査風景，下：調査団員

第１章　発掘調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

昭和57年10月，三水村文化財調査員久遠氏から〝五輪塚で耕地整理事業が計画されている。〟との情報がもたらされ，関係者に照会したところ補助事業外全額受益者負担による耕地整理事業が計画され，しかも収穫後直ちに着工したいと言うことであった。

この地域は，河川改修工事などの際，かつて土器・石器類が出土した実績があり，埋蔵文化財包蔵地として周知の遺跡であるため，直ちに県教委文化課に連絡，御指導を仰ぐとともに受益者と協議，10月21日には臼田指導主事の現地調査をいただき，また，12月22日には県教委，地教委，受益者三者立合のもとに数ヵ所の試掘を実施した結果，うち２ヵ所で土器片などを発見したため試掘ヵ所を中心に調査区域を設定，58年４月中に発掘調査を実施することになった。

その後文化課，県史刊行会，樋口指導主事の御紹介をいただいて調査担当者も決定，３月18日には〝鐘山遺跡発掘調査会〟の初会合を行い，４月11日から現場での表土剝ぎを実施，以後悪天候に悩まされながらの発掘調査となった。　（事務局）

第２節　調査体制

鐘山遺跡発掘調査会

顧　問　篠原行雄（村　長）
委　員　小林豊太（教育委員長）
〃　石川俊夫（教育委員長職務代理者）
〃　小林　誠（教育委員）
〃　相沢栄位（〃）
〃　渋澤静雄（教育長）
〃　久遠義正（文化財調査員）
〃　村松直康（〃）
〃　高野　誠（〃）
〃　小林平吉（〃）
〃　山岸　斉（関係地主）
〃　中川　功（〃）

委　員　伊　藤　和　男（関係地主）
〃　　北　沢　達　男（　〃　）

事務局

三水村教育委員会事務局

調査団

調査団長　岩　佐　今朝人（日本考古学協会会員）
調査主任　百　瀬　忠　幸
調 査 員　横　山　かよ子
〃　　三ッ井　きみ子
調査協力者　平林　彰（日本大学卒），土井義行（東海大学研究生），小磯　学，倉橋　純（以上，東海大学学生）

第3節　調査経過（調査日誌より）

4月12日（火）晴　発掘調査関係者一同三水村公民館に集合ののち，発掘現場への資材・器具の搬入，ならびにテントの設営を行う。調査着手式終了後直ちに調査を開始。発掘区を中心に周辺部を含めた地形測量を行うとともに，それと並行して発掘区の東側よりバックホーにて表土層を剥ぐ。遺構は不検出。夕刻より公民館にて調査団と事務局との親睦会がもたれた。

4月13日（水）曇のち晴　昨日に引き続き表土除土作業を行う。グリットの設定および遺構確認のための精査を開始する。第Ⅲ層上面付近より，土師器，銭貨などが検出され始める。8Pグリッドからは縄文土器も出土し，調査の成果が期待される。

4月14日（木）晴　発掘区全体を精査。北西部において配石様の遺構および落ちこみを検出する。昨日出土分も含め，遺物を1点ずつドット図に記載するとともに，各々のレベルを測定する。

4月15日（金）雨　昨夜からの雨により現場の状態がおもわしくなく，本日の調査は中止とする。

4月16日（土）雨のち曇　雨のあがった午後より調査を再開。西側部分の精査をさらに進め，遺構のプラン確認に努める。

4月17日（日）雨のち曇　昨日同様，午前中は雨のため調査できず，午後からの作業となる。午後より，北西部を中心に精査を進め，土壙および多数のピットを検出した。ピット集中部お

よびピット確認面より土師器・砥石・粘土塊などが出土した。

4月18日（月）晴のち曇　発掘区北西側出土遺物の実測およびレベルの測定を行う。遺構・遺物の個別写真を撮影後，遺構プランの確認のため第Ⅴ層まで掘り下げる。

4月19日（火）曇　北西部の出土遺物の取り上げ。7Pグリットおよび11～12K・Lグリットにおいて，配石様の遺構を検出し，その付近の拡張・精査にとりかかる。

4月20日（水）雨のち曇　午後より，昨日検出した配石様遺構およびその周囲の精査を続行し，全体の把握に努める。

4月21日（木）晴　発掘区西半部より検出されたピット群の半截，覆土観察を始める。東側より重機による掘り下げを開始し，精査の結果，7Pグリットから検出された配石様遺構の下部にほぼ正方形を呈する土壙があることを確認した。11～12K・Lグリットの配石については，長径3m以上をはかる楕円形を呈するものと把握した。

4月22日（金）雨のち晴　午前中は雨のため，1時間ほどで作業を中止する。午後より作業を再開し，7Pグリットおよび11～12K・Lグリットから検出された配石遺構の写真撮影と北西部のピット群の完掘を行う。

4月23日（土）雨のち曇　発掘区東側を中心に上面確認を行うが，本日終了時点では新たな遺構は検出されなかった。ただし，6Rグリットを中心に土師器・灰釉陶器などが比較的まとまって出土した。

4月24日（日）快晴　本日より東海大学の学生2名を含む3名が新たに参加し，配石遺構やピット群などの実測を開始する。

4月25日（月）快晴　昨日に引き続き各遺構の実測を進める。一方，6R・3グリットにおいて性格不明の落ちこみが新たに検出された。

4月26日（火）快晴　各遺構および発掘区域の実測，写真撮影を終え，調査のすべてを終了する。なお，本日は地元の小学生（5・6年生）が見学に訪れるとともに，有線放送の取材があった。

4月27日（水）晴　テント等発掘資材・器具の撤収。

5月以降　遺物・測図・原稿執筆等の整理作業を行う。

（百瀬）

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

三水村は長野県の北部に位置し，斑尾山（1381.8ｍ）南麓の２つの支脈を中心として広がる，面積35.66㎢，東西6.95㎞，南北10.45㎞のほぼ三角形に近い形をした村である。東部は下水内郡豊田村，南部は豊野町，西部は鳥居川を境として牟礼村，北西部は信濃町にそれぞれ境をなしている。

地形を概観すると，長野盆地から飯山盆地西縁にかけて数段の浸食平坦面が広がっており，三水村もその一面を構成している。いわゆる鼻見面と呼ばれる平坦面は，鼻見城山（722.7ｍ）に由来し，赤塩面も，三水村の大字にその名称が由来している。三水村は，北－西部が主として山地に，南部は平坦地に大別されるが，鼻見面が山地を形成しており，前述の鼻見城山，戸谷峰（756.0ｍ）など標高700ｍ前後の山がこれにあたる。また，赤塩面（およそ500～550ｍ）はゆるやかな起伏をもった平坦部を形成しており，大部分の耕地が広がっている。三水村の地形は，北西部の鼻見面と南部の赤塩面で構成されているのである。

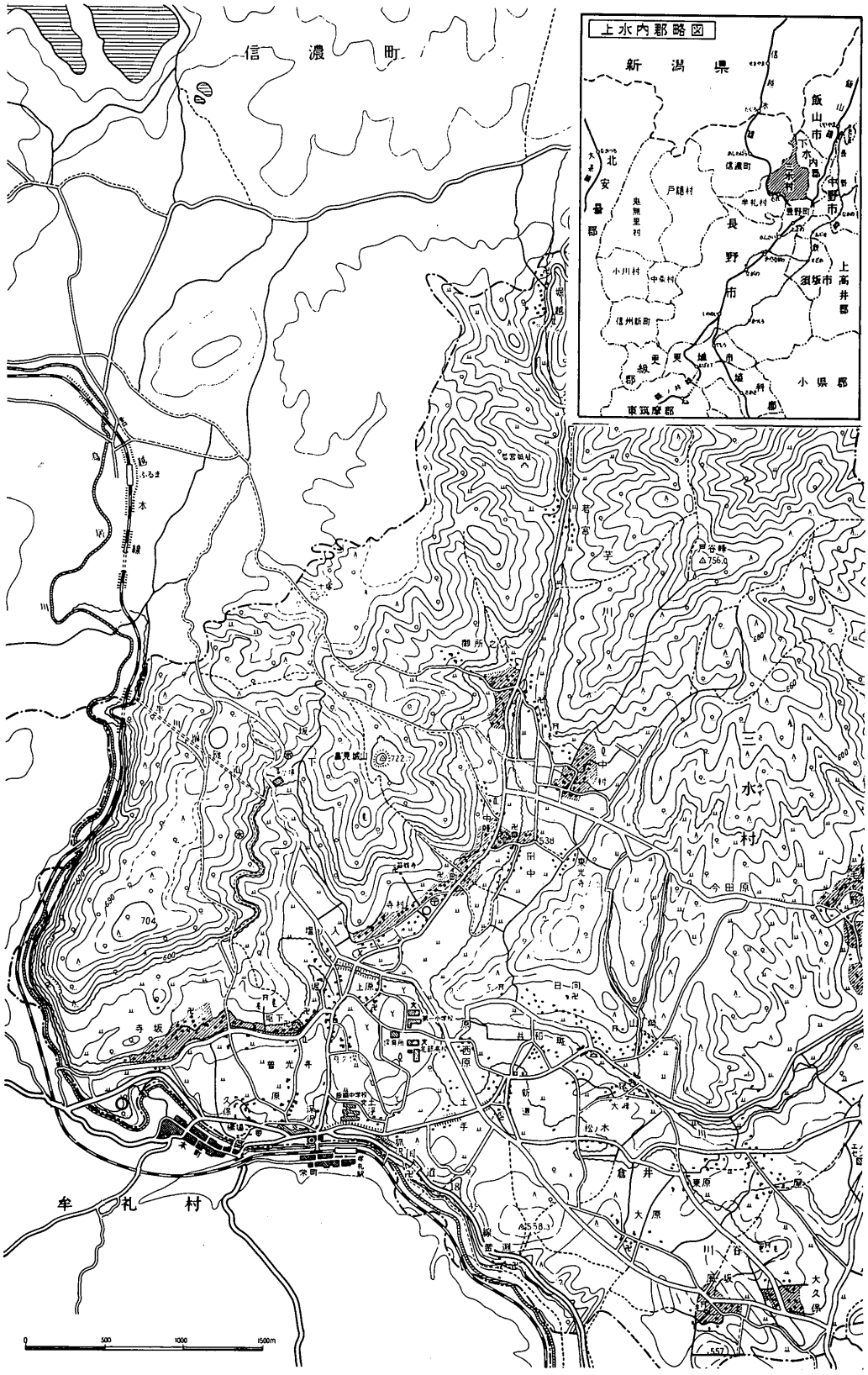
村内を流れる主な河川は，戸隠村越水ヶ原に源を発する鳥居川と村内芋川に源を発する斑尾川である（現在，斑尾川は堀越地籍を開削し，信濃町荒瀬原から斑尾山麓の水を引水している）。

鳥居川は，信濃町古間～牟礼村小玉間と三水村釜淵～豊野町川谷の間で深く両岸を浸食し，Ｖ字形の渓谷をつくり出し，諸水を合わせて豊野町浅野で千曲川に合流する。また，その間上段盆地を沖積し，牟礼・三水・豊野の流域沿岸では狭小な河岸段丘（河棚沖積地）をいくつか形成している。

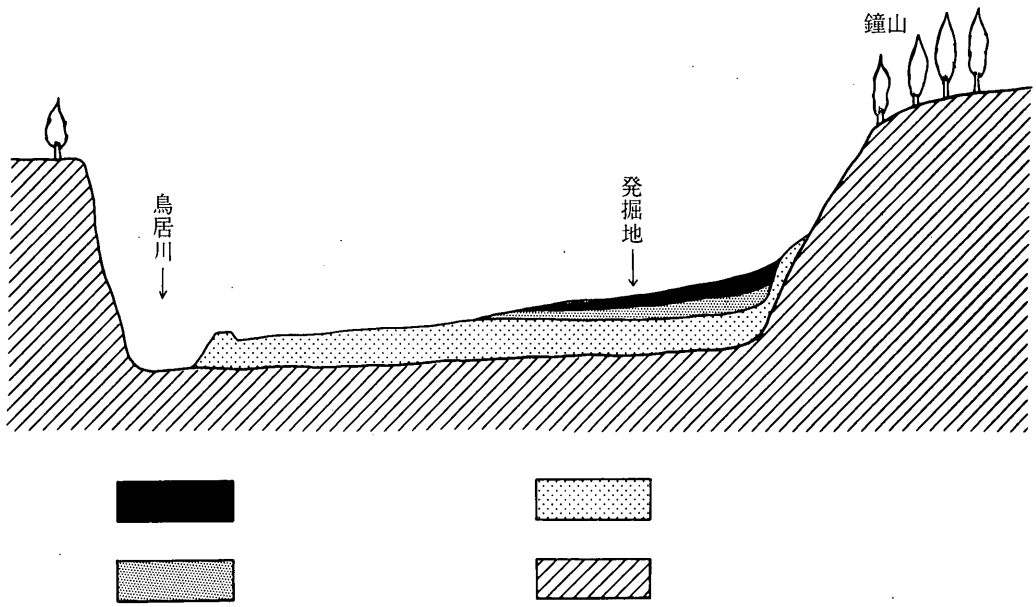
斑尾川は，芋川から倉井・赤塩と北から南東に貫流して豊田村に入り，斑川と合流して豊田村替佐で千曲川に合流する。

地質学的に見ると，新第三系の急斜した，しかも複雑な構造をした地層を基盤とし，その上位を不整合に飯綱・斑尾両火山起源の火砕岩類，泥流堆積物およびローム層が重なっている。黒姫・妙高火山起源の堆積物は層厚も数ｍ程度とわずかで，ローム・スコリア・パミス層から成り，全体をうすくおおっている。

今回発掘した地域は，大字普光寺字五輪塚と呼ばれている。詳細は歴史的環境にゆずるが，康保年間（964）に性空上人が開基以後，永禄２年（1559）まで寺があったといわれ，工事をした際，多くの五輪塔が出土したことに地名のおこりがあるらしい。また，裏手にあたる鐘山という地名も，当時，鐘つき堂があったことに由来しているといわれる。



第1図　遺跡附近地形図（1：40,000）



第２図　鐘山―発掘地―鳥居川模式断面図

この度の緊急発掘調査は，付近一帯の構造改善事業のため行われたものであるが，畑地として利用されていた極めて狭小な地域の発掘であった。以下，具体的な環境にふれる。

発掘地は鳥居川左岸（北側）の河棚沖積地で，牟礼村小玉付近で大きく蛇行するところである（第１図)。右側（南側）は十数ｍの高さの崖で，鳥居川の浸食を直接うけている攻撃斜面である。また，発掘地の北側には前述の鐘山が７～８ｍの高さで迫っており，一帯の河棚沖積地は南向きの日あたりのよい凹地となって好条件を呈している。したがって，鳥居川は鐘山から次第に南に開析していったことがわかる。さらに，鳥居川の河礫より上位に，信濃町で見られる柏原黒色火山灰質起源と見られる黒色土が見られる。信濃町では，この火山灰層の下部～上部より縄文早期～後期の土器が出土していることから，断定はできないが，この河棚沖積が形成されたのは，縄文早期以前と考えられる。

遺物包含層は20～30cm厚の耕土と思われる火山灰質の黒色土と，鳥居川の河床礫層に挟在された，やはり火山灰質黒色土である。しかし，この包含層は鐘山に近い方では厚いが，鳥居川に近づくにつれて急激に消滅し河床礫が見えてしまい，発掘の現時点では限られた分布をしていることがわかった（第２図)。さらに，円礫が含まれず水の作用が考えられないこと，鐘山の丘陵部に同様な黒色土が見られないことから，この黒色土層は様々な条件下，特にふきだまりの状態で形成されたと考えるのが妥当であろう。

いずれにせよ，かつての鐘山は国道18号線の切り通しで真っ二つにされ，五輪塚には稲穂が黄金色に波打っている。

（小林　正昇）

第2節　歴史的環境

長野市から国道18号線を約16km北進すると，道は鳥居川を中に挟んで暫く国鉄信越線と並行して走る。山間約4kmを経て左側に牟礼駅を見る辺から次第に視野が開けてくるが，このあたりが三水村の西南端大字普光寺の入口である。そしてなお1km弱新鳥居橋で村界を越え，鳥居川と信越線に別れを告げ，国道は更に新潟県方面へ北上するが，この橋の手前，切通しの南側，大きく屈曲した鳥居川に包まれた耕地が三水村大字普光寺　字五輪塚・字鐘山地籍であり，字古城，字善知鳥など由緒あり気な字名を持つ耕地が連続している。

この五輪塚・鐘山地域では，かつて鳥居川改修時に五輪塔，石器，土器片等多数が出土，文化財包蔵地として遺跡台帳に登載された。また，字鐘山の非耕地部分は，平安時代の天台宗寺院〝普光寺〟創建の地と伝えられている。三水村にはこの2遺跡を含む計31箇所の遺跡が周知されており，大字普光寺だけでも9箇所を数え，うち3箇所が寺院・居館址と目されるほか，残る6箇所は縄文～平安期の包蔵地である。また，その他村内他地区の遺跡もその殆んどは縄文～平安期の包蔵地とされており，城館址などはごくわずかである。

さて今回，緊急発掘調査を実施した鐘山には，寺伝によると正暦元年(990)年天台僧性空によって〝普光寺〟(性空山玄叟院）が創建され，普光寺村一円を寺領として大いに栄えたと云う。この寺はその後，天文年間に浄土宗知恩院末に転じ，同22（1553）年甲越の争いに巻き込まれて焼かれ，普光寺村字前林の通称堂屋敷に移転，更に慶安3（1650）年火災にあって，現在の字堰下地籍へ三転，更に弘化4（1847）年多数の死者を出したいわゆる〝善光寺地震〟によって倒潰し，建物は再建したものの文書類は殆んど消滅，更にここ10年来無住の寺と化している。

この鐘山，五輪塚から南鳥居川を隔てた牟礼村牟礼（もと北国街道牟礼宿）には，かつて矢筒城があり，城主島津氏は普光寺村も一部領有し，寺院としての普光寺にも多大の保護を加え，16世紀初頭の永正年間に大いに修理の手を加えたと云う。ところが，それから30年ほど後には甲州武田との争いが北信にも及び，前記の経過を経てこの寺は二転，三転するが，この寺が移転した後のこの土地は，数戸の農家の居住地となり，1847年の〝普光寺地震〟迄は住宅があり，震災後生き残った人達が一段上の台地に移住し，それらの宅地も農耕地となった。

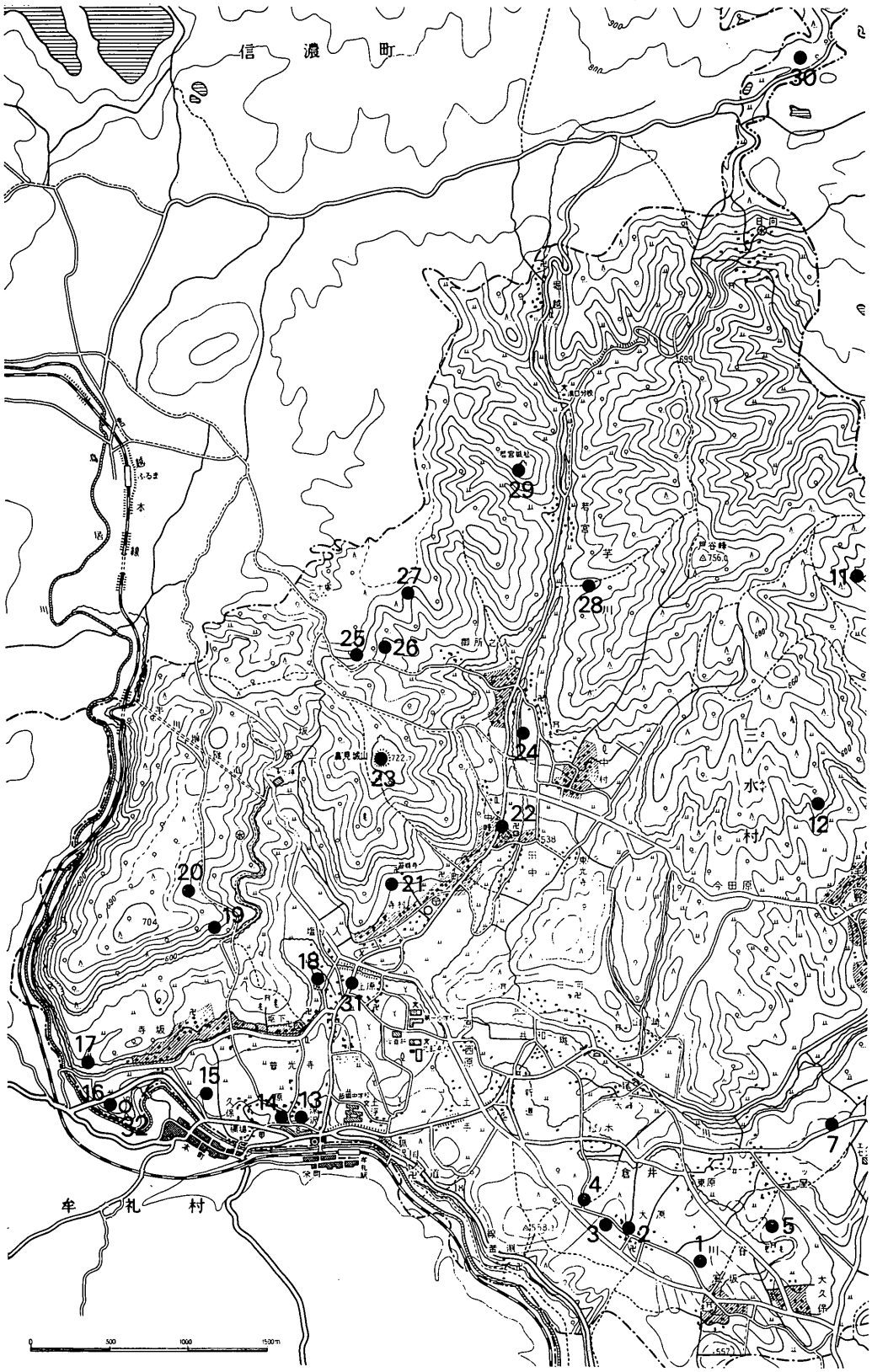
わずか百数十年前まで現実に人が住み，現在迄耕作が続けられ，また，耕作者によるとこの土地は非常に保水力が弱く，何次にも亘って客土をし，小規模な耕地整理を実施しているとのことであり，遺跡が遺跡としてどの程度残存しているか不安を感じさせられた。また，当普光寺地区出身で長野県埋蔵文化財センター勤務の小柳義男氏の報告によれば，同じ普光寺地区内の西原遺跡（同氏の呼称は原西遺跡）で多数の土器・石器を採集，研究しておられるが，この他川入遺跡（小柳氏のいう寺坂西遺跡)，前林遺跡など専門家の手の入らない遺跡が周辺に点在しており，今後，専門家による調査，研究を大いに期待するものである。　（久遠）

第3節　村内の遺跡

三水村には下記に示した一覧表のごとく，30余りの遺跡が確認されている。それらは縄文時代の遺跡と平安時代の遺跡によってその多くが占められており，とりわけ平安時代の遺跡が占める割合の高いことは，縄文時代の遺跡が多く存在する県内の一般的なあり方を考えるとき，地域的な様相を強く指し示す事象として特に注意される。（百瀬）

三水村遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代	所在地	地目	備考
1	桜畑遺跡	包蔵地	平安	倉井桜畑	畑	
2	大原〃	〃	縄文・平安	〃　大原	畑・宅	
3	中畑〃	〃	縄文	〃　中畑	畑	
4	与四郎屋敷〃	居館址	歴史	〃　〃	〃	
5	一ッ屋〃	包蔵地	縄文	〃　一ッ屋	〃	
6	関取場経塚	経塚	近世	〃　関取場	〃	
7	上赤塩遺跡	包蔵地	縄文	赤塩　上赤塩	畑・宅	
8	瘤屋敷〃	〃	平安	〃　瘤屋敷	平	
9	毛見〃	〃	縄文	〃　毛見	畑・水田	
10	東柏原〃	〃	〃	東柏原	畑	
11	天沢〃	〃	〃	〃　天沢	山林	
12	上今田〃	〃	〃	赤塩　上今田	畑	
13	東原〃	〃	平安	普光寺　東原	〃	
14	西原〃	〃	縄文	〃　西原	〃	
15	古城〃	〃	〃	〃　古城	水田	
16	五輪塚〃	〃	歴史	〃　五輪塚	〃	
17	川入〃	〃	縄文	〃　川入	〃	
18	堀の内居館址	居館址	歴史	〃　久留馬(堀)	宅	
19	普光寺址	寺院址	〃	〃　鐘山	畑・山林	
20	前林遺跡	包蔵地	縄文・平安	〃	山林	
21	寺村〃	〃	縄文	芋川寺村	畑	
22	芋川氏居館址	居館址	歴史	〃　田中	宅	
23	鼻見城跡	城跡	〃	〃　鼻見城跡	山林	
24	小野遺跡	包蔵地	縄文・平安	〃　小野	水田	
25	赤兀〃	〃	縄文	〃　赤兀	山林	
26	京洛〃	〃	〃	〃　京洛山之神	畑	
27	天神〃	〃	縄文・平安	〃　天神	〃	
28	伊豆ヶ入〃	集落址	〃	〃　伊豆ヶ入	〃	
29	若宮城址	城跡	歴史	〃　若宮	山林	
30	入土橋遺跡	包蔵地	平安	〃　入土橋	畑	
31	菖蒲田〃	〃		普光寺　菖蒲田	水田	
32	**鐘山遺跡**	寺院址？	平安	〃　五輪塚	〃	

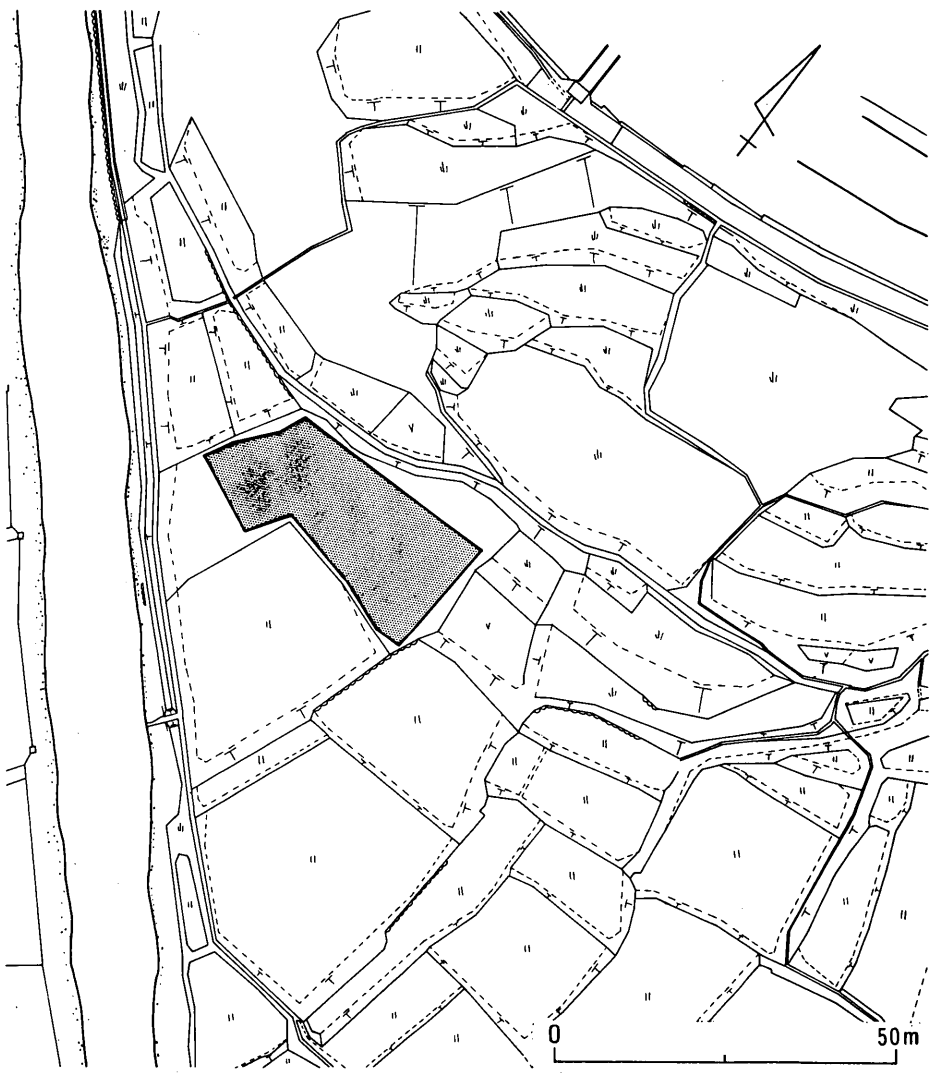


第3図　周辺遺跡分布図（1：40,000）

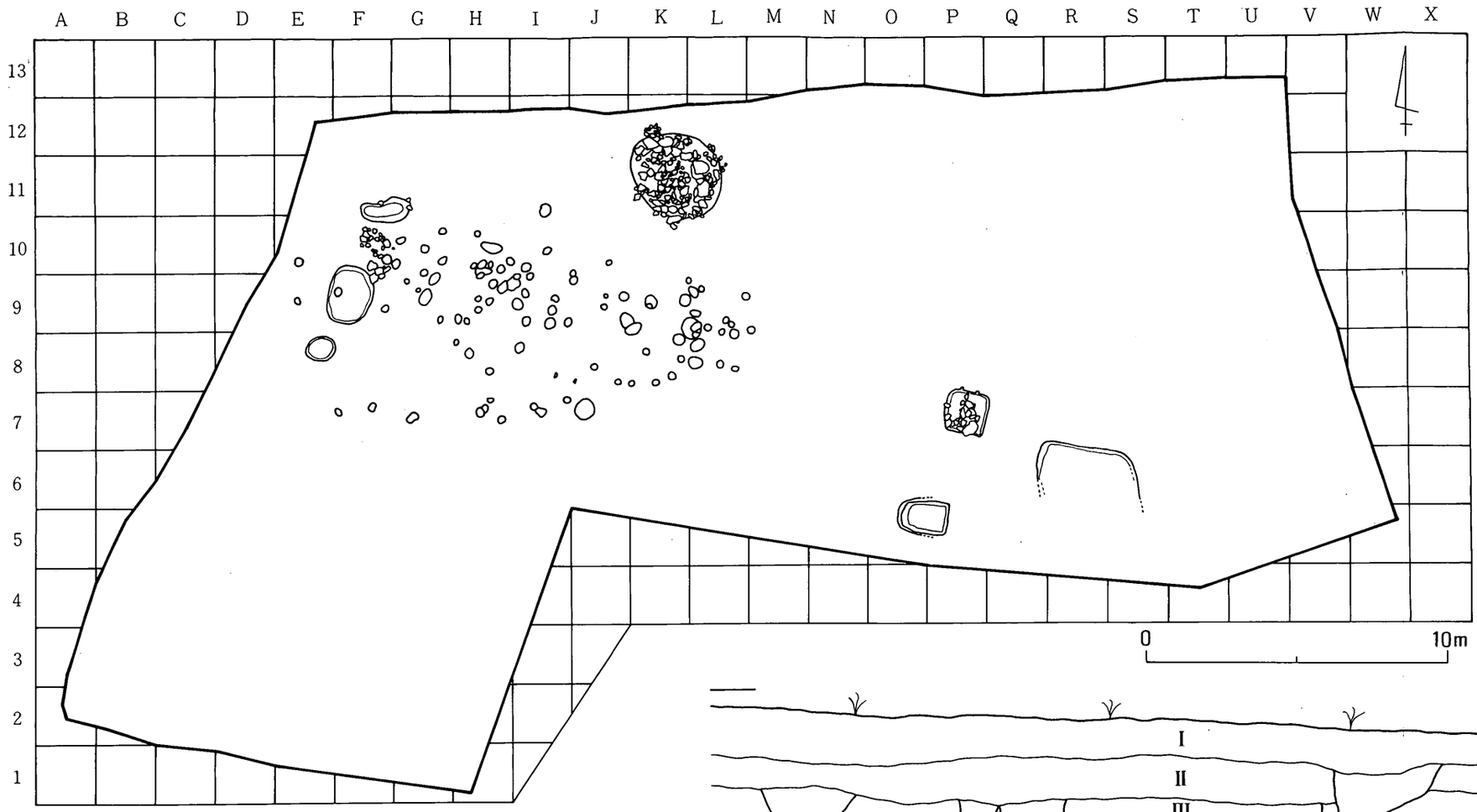
第３章　発見された遺構と遺物

長野県上水内郡三水村，鐘山遺跡に対する今回の発掘調査は，耕地整理事業に対する事前の記録保存を目的として実施された。事業対象地区のうち，遺物の出土が確認されていた西端部附近を中心に，総面積660㎡余りの発掘区を設定して行われ，２週間にわたる調査により，土壙５基，ピット群１，配石遺構２基，性格不明の落ちこみ１基が検出された（第４・５図）。

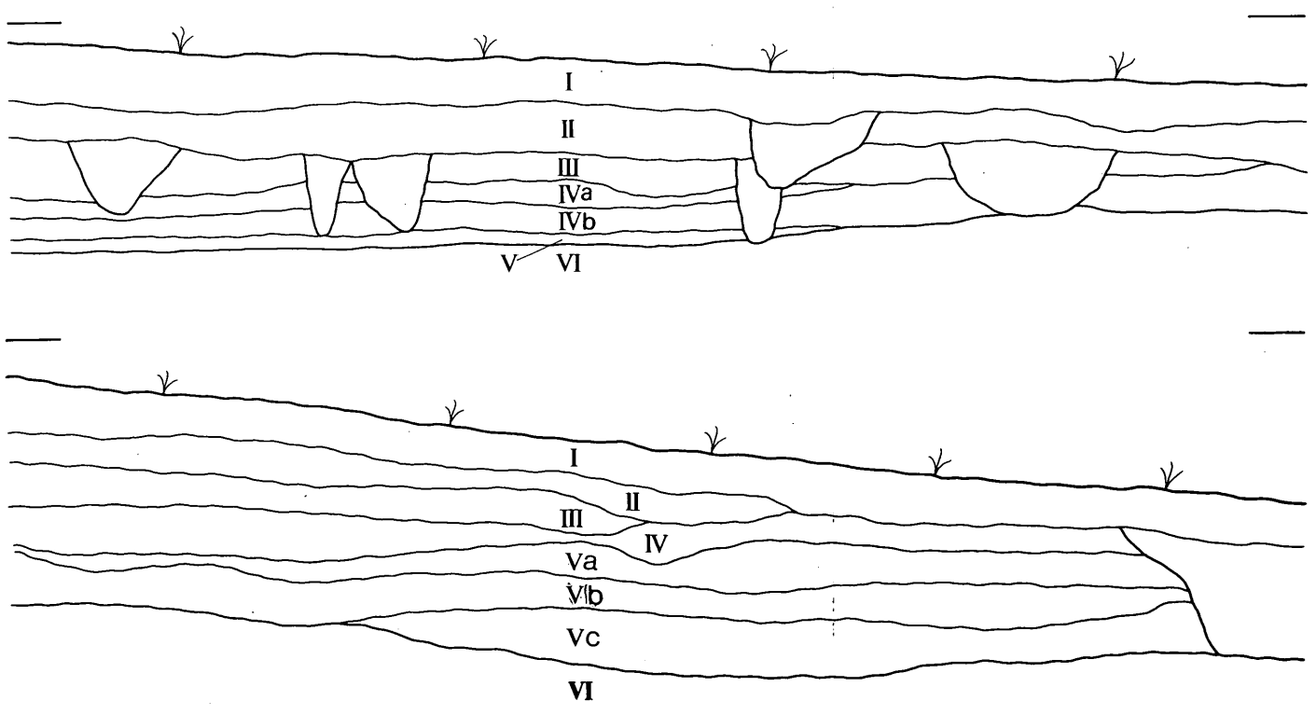
以下，層序および検出された遺構と遺物についての個別的な説明を試みることとする。

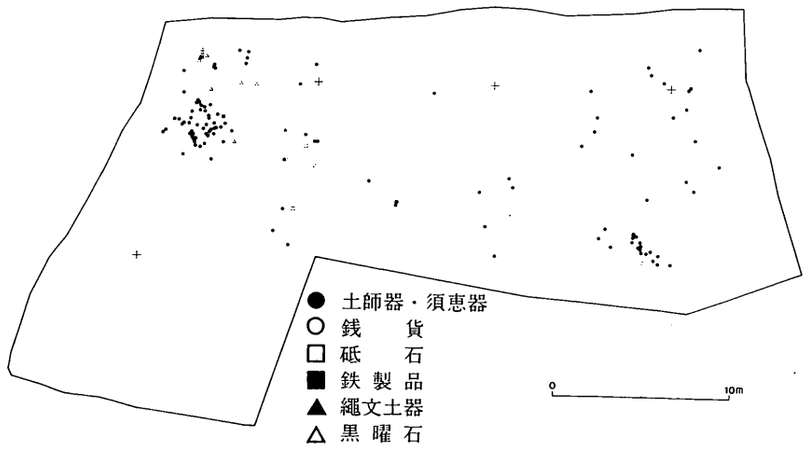


第４図　発掘調査区域図



第5図　遺跡全体図・セクション図





第6図　遺物分布図（1：200）

第1節　層　序

鐘山遺跡は先にも述べたごとく，鳥居川に面して位置し，背後の丘陵状平坦面から供給される土砂と大きく蛇行して流れる鳥居川の堆積作用とによって形成された狭小な平坦部に立地している。したがって遺跡内における土層も一様ではなく，比較的複雑な堆積状況を呈している。

基本的な層序は第5図に示すとおりであり，北側から南側へゆるやかに傾斜する二次堆積砂礫ローム層上にのっていることを除けば，発掘区の西側と東側とでは堆積状態に大きな差異が認められる。とりわけ，東側は表土層をのせる第II層：暗茶褐色土下に，小礫ないし砂粒を多く含む土層がほぼ傾斜にそって堆積しているほか，さらにその下部には，火山灰性の粒子の粗いザラザラとした黒色土が60～70cmと厚く堆積していた。

一方，西側部分の第III層上面には，ピット群の上部を中心として，炭化物とやや褐色をおびた灰白色粒土粒が面的な広がりをもって存在しており，また，ピット群の掘り込み面も第III層上面にあることから、第III層上面にひとつの生活面が存在したことが理解された。この点に関しては，第II層直下であるという点において東側部分も同様であり，基本的には同一の生活面ないし遺構構築面を共有していたものと考えられる。

なお，河川の流路に近い発掘区の南端部にはローム混りの二次堆積砂礫層の著しい発達が認められた。

（百瀬）

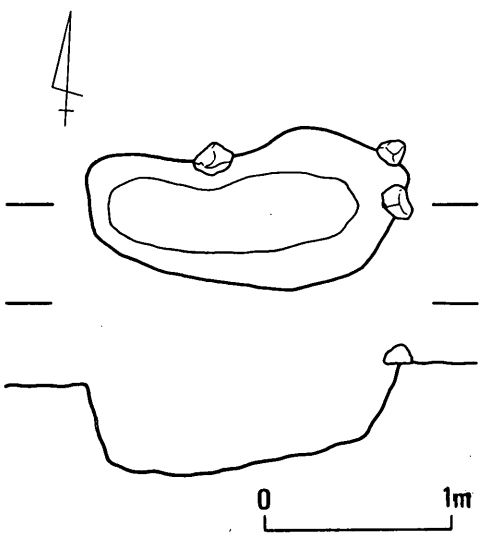
第2節　遺　構

1．土　壙

1号土壙（第7・8図）

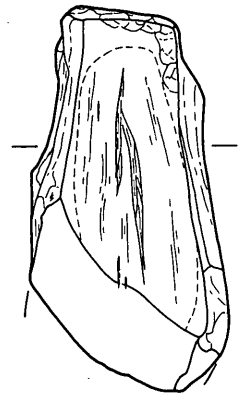
遺構（第7図）　発掘区北西部，11Fグリッドを中心に検出された。平面形は不正長円形を呈し，長径170cm，短径60～80cmをはかる。壙底は西側にゆるく傾斜しており，深さは40～50cmをはかる。壁は急傾斜で立ちあがり，断面逆台形を呈す。土壙掘り込み面に拳大の石が数個遺存していた。覆土には，ローム粒を含む黒～暗褐色の砂質土の堆積がみとめられた。

出土遺物（第8図）　確認面下より大形の砥石が1点検出された。一方の端部を欠損する



第7図　1号土壙

が，現在長最大19cm，最大幅10cmをはかる。断面はほぼ正方形を呈する。長軸面３面が砥面として使用されており，各砥面には長軸方向を中心に砥ぎ方向を示す磨滅が認められるほか，１面には幅１～数mmの「Ｖ」字状ないし「Ｕ」字状を呈す溝が数条残されている。このほかに，土壙上部の耕作土中より石臼が１点出土しているが，本址との関係は不明である。　時期　不明。

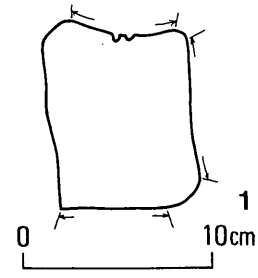


２号土壙

遺構(第９図)　８Ｅグリッドに，３号土壙に南接して存在する。確認面は第Ⅲ層上面であり，周囲に硬化面の広がりが認められた。平面形は不正楕円形を呈し，長径103cm，短径86cmをはかる。深さは21cmと浅く，ローム層をわずかに掘り込むのみであった。覆土には指頭大のロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

出土遺物　なし。

時期　不明である。



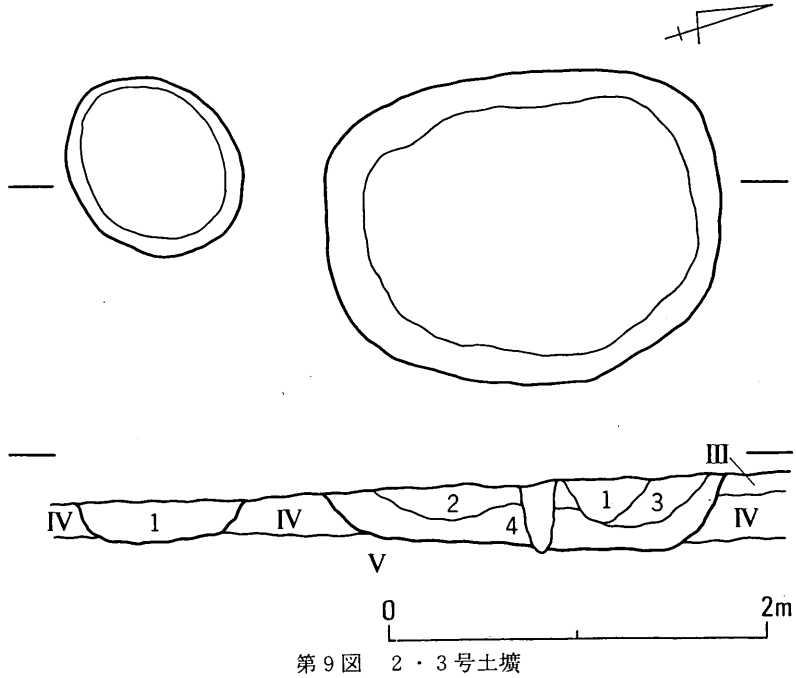
第８図　１号土壙
出土遺物(１：４)

３号土壙（第９図）

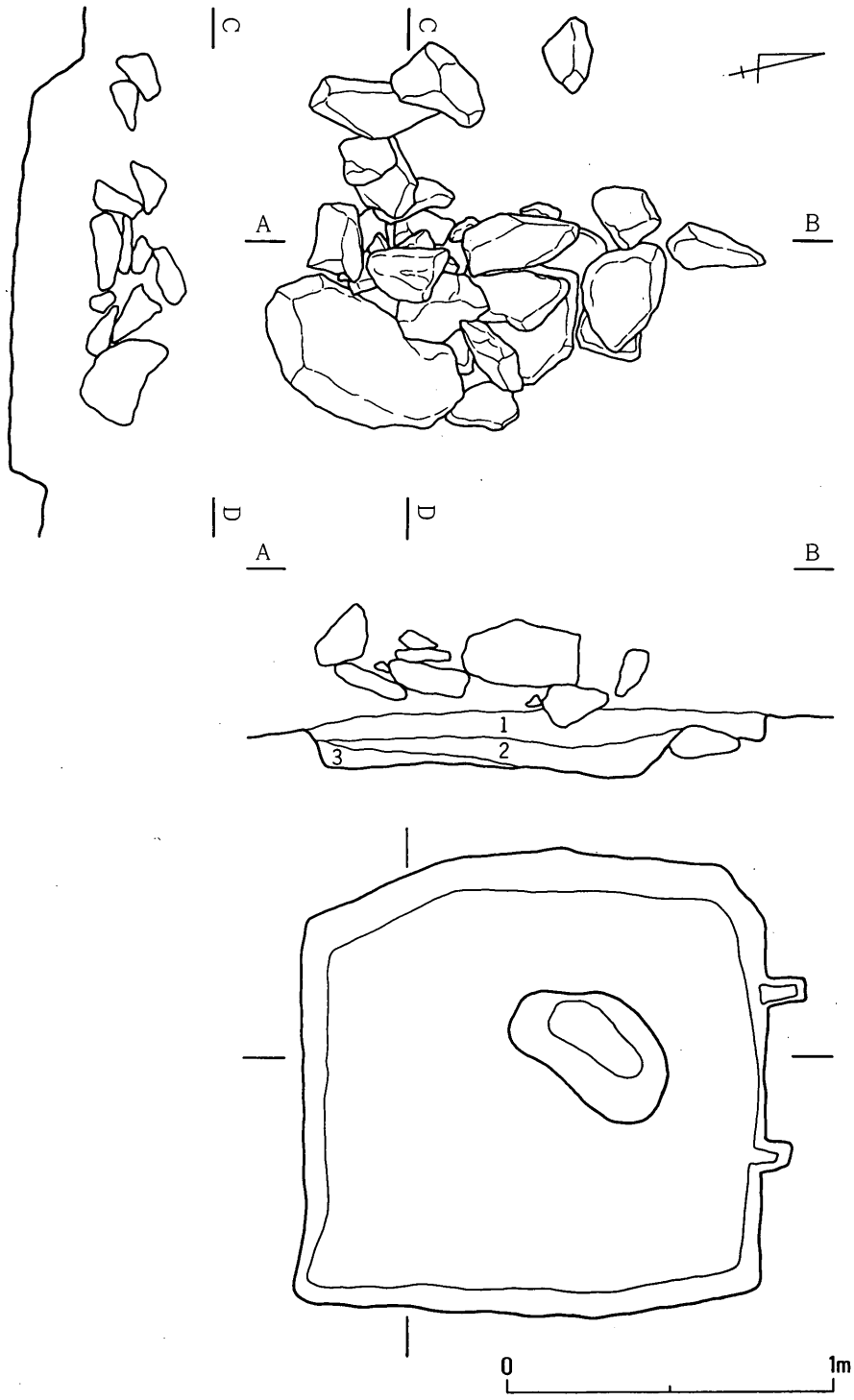
遺構（第９図）１号土壙の南西側，９Ｆグリッドを中心に存在する。平面形は胴の張る隅丸長方形を呈する。壙底はほぼ平坦であるが，壁との境はゆるやかなカーブを示す。覆土は４層に分かれる。第１層　ローム層を含む黒褐色土，第２層　ローム粒を含む暗褐色土，第３層　ロームブロックを含む暗褐色土，第４層　ロームブロックと黒褐色土を含む暗褐色土である。本址の性格および他遺構との関係は不明である。

出土遺物　なし

時期　不明



第９図　２・３号土壙



第10図　4号土壙

4号土壙（第10図）

遺構(第10図) 発掘区中央部やや南東寄り，７Ｐグリッドに位置する。規模は140×141cmの不正方形を呈し，深さは確認面より15～20cmをはかる。北側に２ヶ所の突出部を有する。壁は比較的急傾斜で立ちあがっており，壙底との境も明瞭である。壙底より20～25cmほど浮いた状態で，20～70cmの自然石が土壙プランに沿うように存在していた。石の数は20個あまりを数える。覆土は３層に分かれる。第１層　暗褐色土（しまり硬・粘性やや有)、第２層　黒褐色土(しまり硬・粘性有)，第３層　褐色土（しまり硬・粘性有）である。

出土遺物　なし

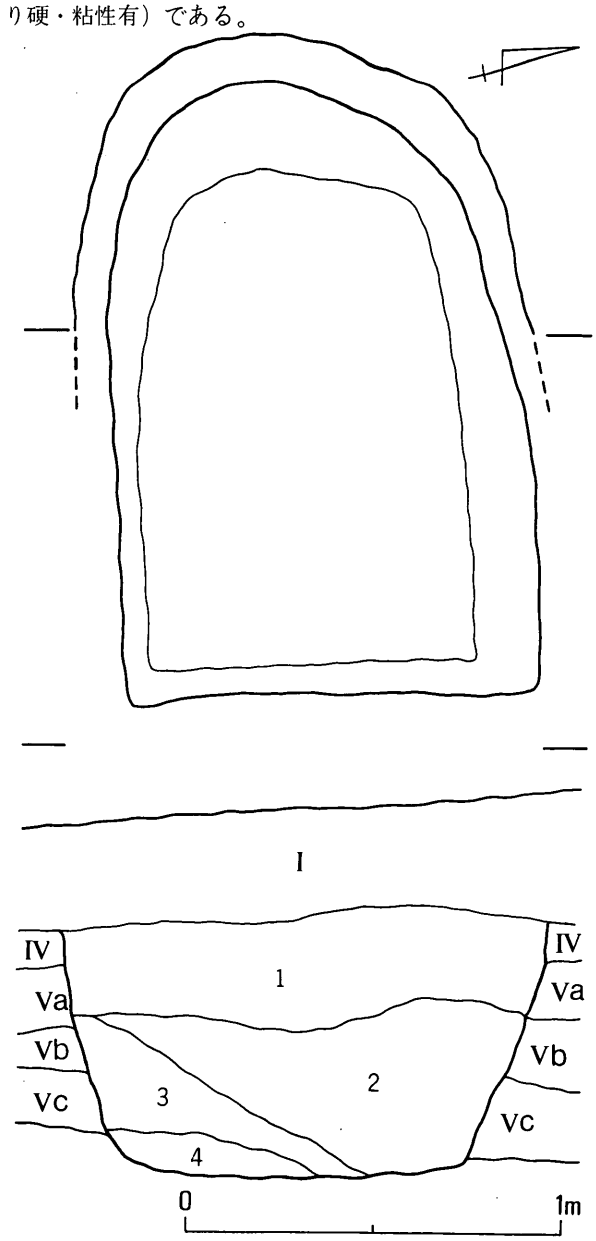
時期　不明である。

5号土壙（第11図）

遺構(第11図) 50・Ｐグリッドに存在し，セクション面において表土層下の第Ⅳ層から掘り込みが検出された。北西側には２～３ｍほど離れて４号土壙と性格不明の落ち込みが検出されているが，本址を含めて主軸方位をほぼ同じくする。平面形は東側がやや張って隅丸状を示すものの，おおむね不整長方形を呈する。長径約180cm，短径約130 cm，壁高70cmを測る。壁は比較的急傾斜に掘り込まれているが，壙底との境はややカーブを示す。壙底はほぼ平坦である。覆土は４層に分かれた。第１層　暗褐色土，第２層　砂質黒色土をブロック状に含む黒褐色土，第３層　黒褐色土，第４層　ローム粒を含む暗褐色土である。

出土遺物　なし。

時期　不明である。

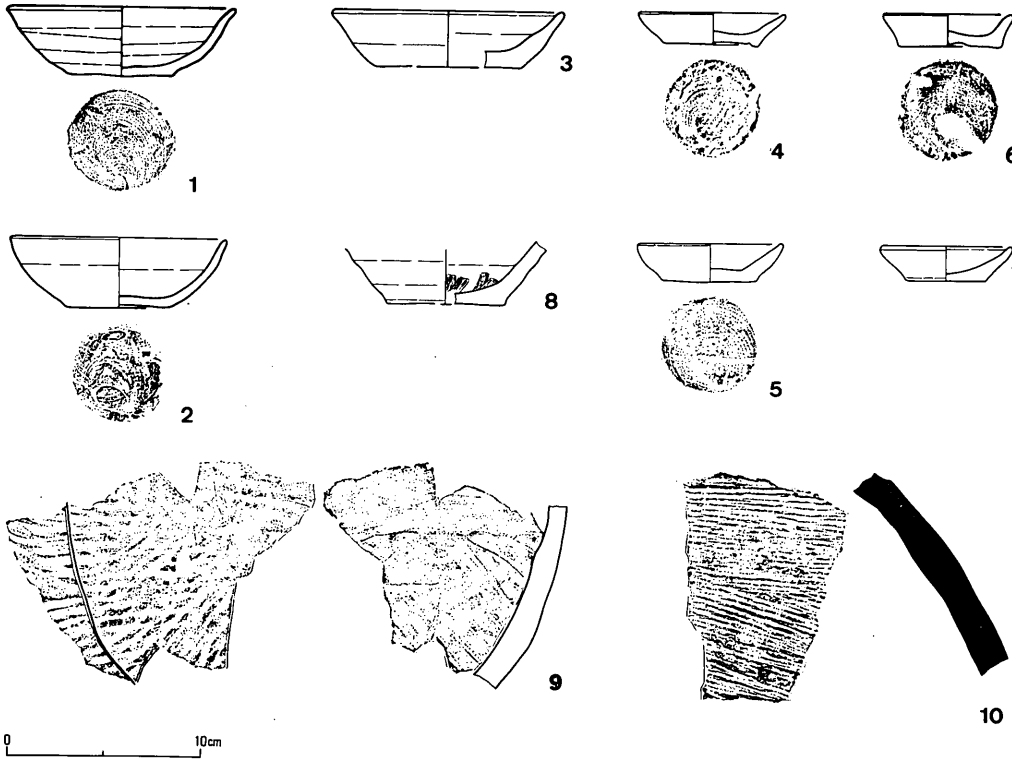


第11図　５号土壙

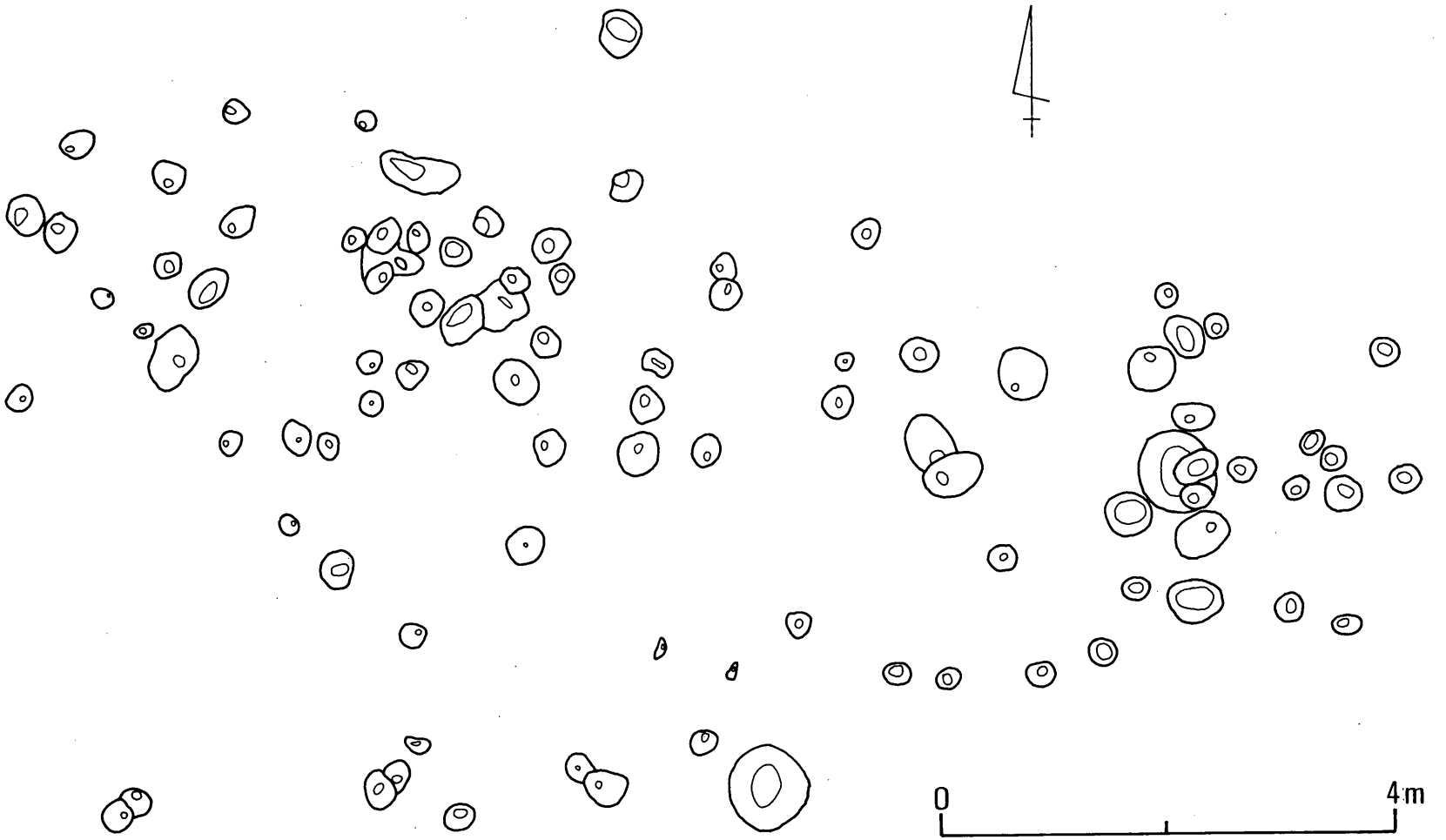
2．ピット群（第12～15図）

遺構（第13図）発掘区の中央部から西側にかけて，東西12m，南北８mの範囲から大小90個以上にのぼるピット群が検出された。掘り込み面が第Ⅲ層上面にあり，その面から炭化物や粘土粒が面的な広がりをもって検出されたことは先に触れたとおりである。ピットはいずれもローム層を掘り込んでおり，径20～40cm，深さ20～30cmの規模をもつ。平面形は概して不正円形を呈するものが多い。配列は雑然としており，明瞭な規則性は認め難いものの，掘り込み面の状態やピット覆土中に扁平な粘土塊や同質の粘土粒が混入していたことなどから，人為的な家ものと判断した。ただし，その形状・規模・性格，さらに他の遺構との関係については，砥石が５点検出された以外にそれらを明確にできる資料を得ることはできなかった。なお，９Ｌグリッド南西隅に位置するピットの覆土上層より，銭貨とともに炭化米が比較的まとまって出土しており注意される。

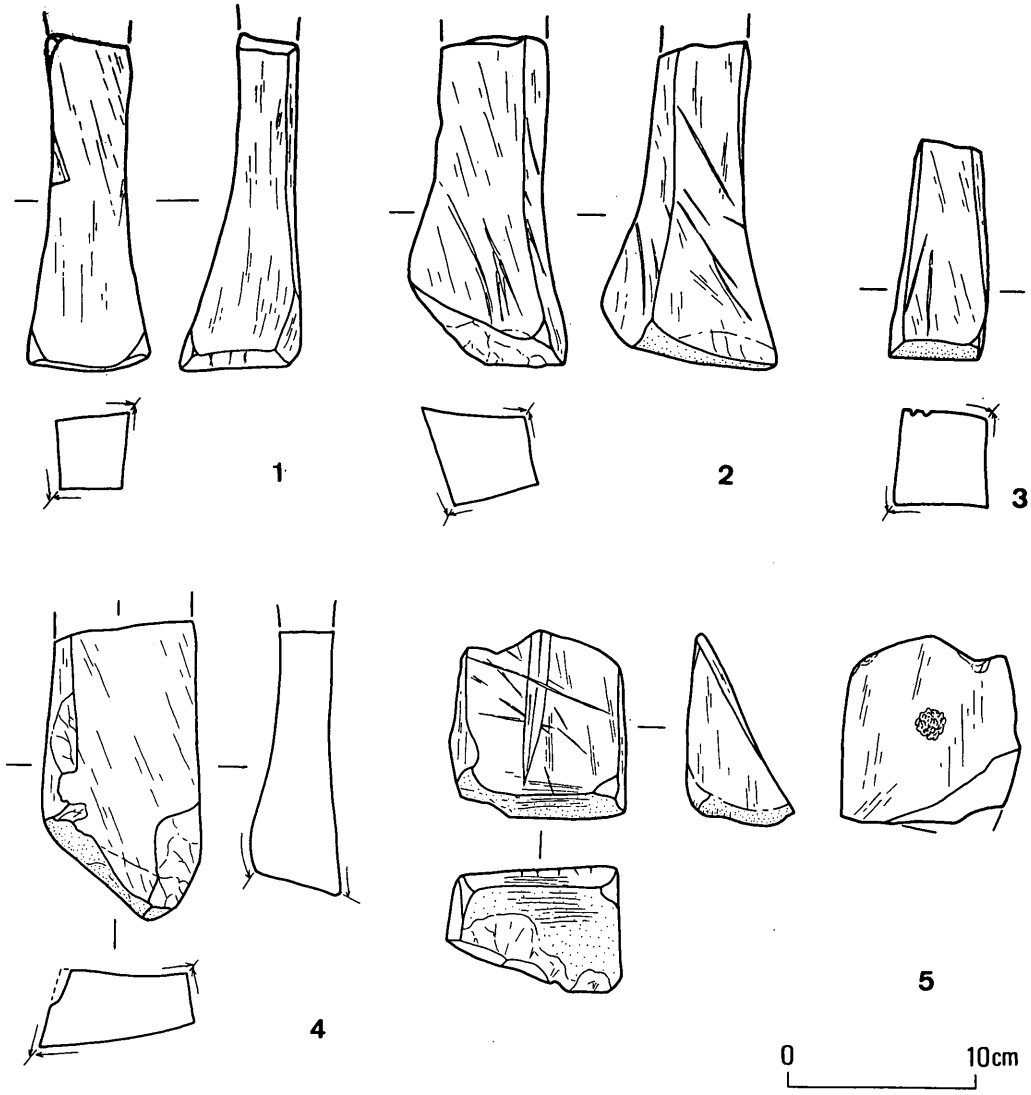
出土遺物　土器(第12図)）第Ⅲ層上面より土師器杯２点，土師器皿１点，土師器小皿４点，土師器甕２点，須恵器甕１点，ほかに小破片若干が検出された。１・２はそれぞれ口径12cm，11.4cmをはかる比較的小形の土師器杯である。丸みをもって立ちあがる体部は内外面ともにロクロ調整が行われ，底面には糸切り痕がみられる。３は土師器皿，４～７は土師器小皿である。６・７は口唇部を中心に煤が付着し，とくに７は内外面におよぶ。８・９は土師器甕。８は内



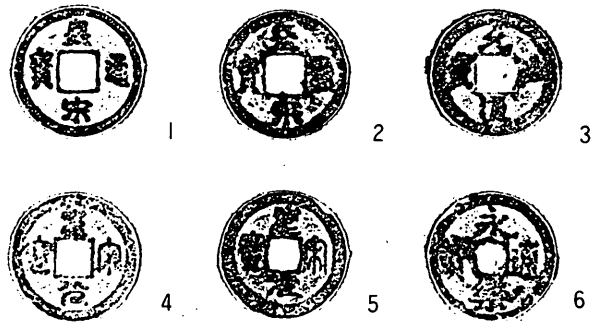
第12図　ピット群出土土器（１：４）



第13図　ピ ッ ト 群



第14図　ピット群出土石器（１：２）



第15図　ピット群出土銭貨（２：３）

面にハケ目，9は外面に斜位の叩き目文が施される。10は外面に平行叩き目文が加えられる須恵器甕の胴部破片である。

石器(第14図)) 比較的小形の砥石5点が出土している。5は著しく研ぎ減りしており，砥面には研ぎ方向を示す細かな擦痕や線条痕，さらに断面「U」字状の溝が刻まれている。

銭貨(第15図) 計7点出土している。1・2は「皇宋通宝」、3は「元祐通宝」，4・5は「聖宗元宝」，6は「永楽通宝」である。他の1点は不明。

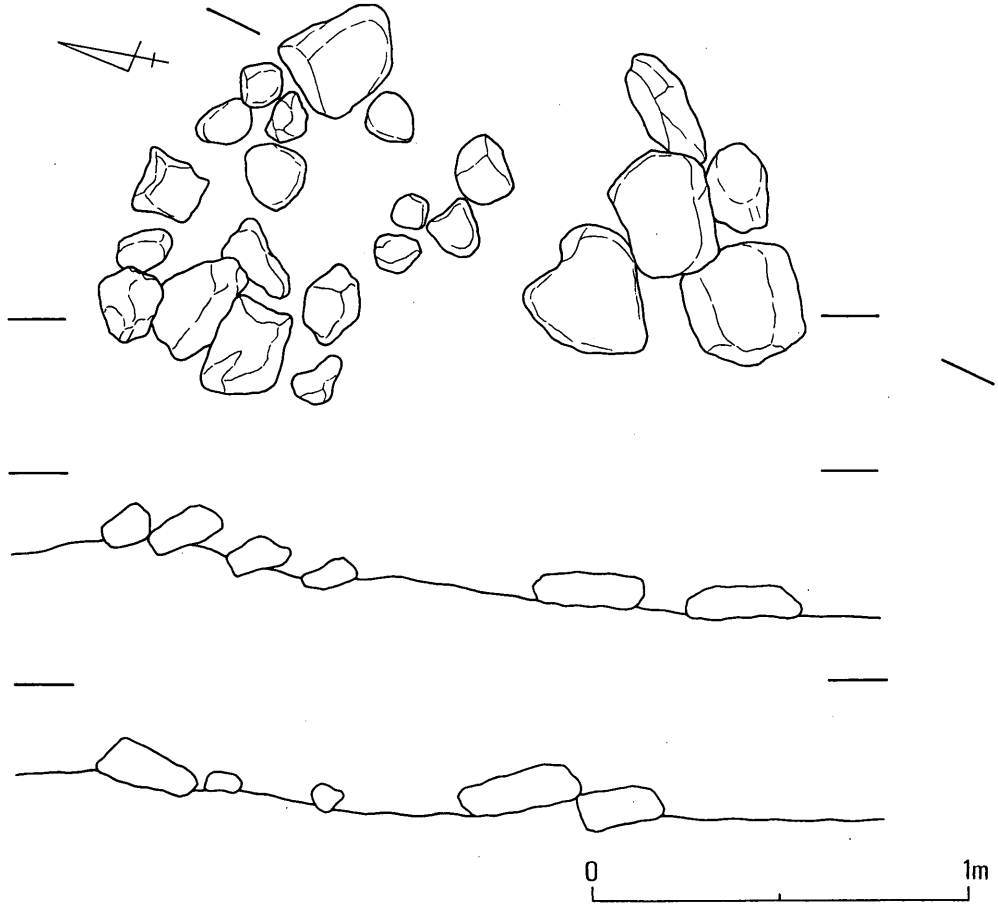
時期 伴出遺物より平安時代中～後期，11世紀後半～12世紀にかけての所産と考えられる。

(百瀬)

3．配石遺構

1号配石（第16・17図）

遺構(第16図) 発掘区北西部に近い10Fグリッドを中心に検出された。東側に接してピット群が位置し，南北方向には1号土壙と3号土壙が近接して存在する。確認面は第Ⅲ層上面であ

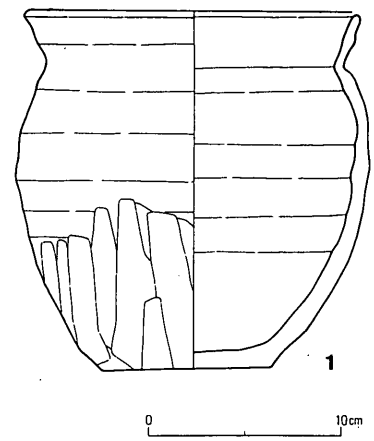


第16図 1 号 配 石

る。形状は，攪乱により遺存状態の悪い南側をのぞき，ほぼ北西－南東に長軸をもつ長方形を呈し，100×70cmほどをはかる。当初住居址に伴うカマドとも考えられたが，焼土の堆積や火熱を受けた痕跡がみられず，本址の性格については周辺遺構との関連とともに，明確にし得る資料を欠く。

出土遺物(第17図)　配石遺構内部およびその南側周辺部より，ほぼ1個体分の土師器甕が出土している。口径17.8cm，器高18.3cmをはかる比較的小形の甕である。

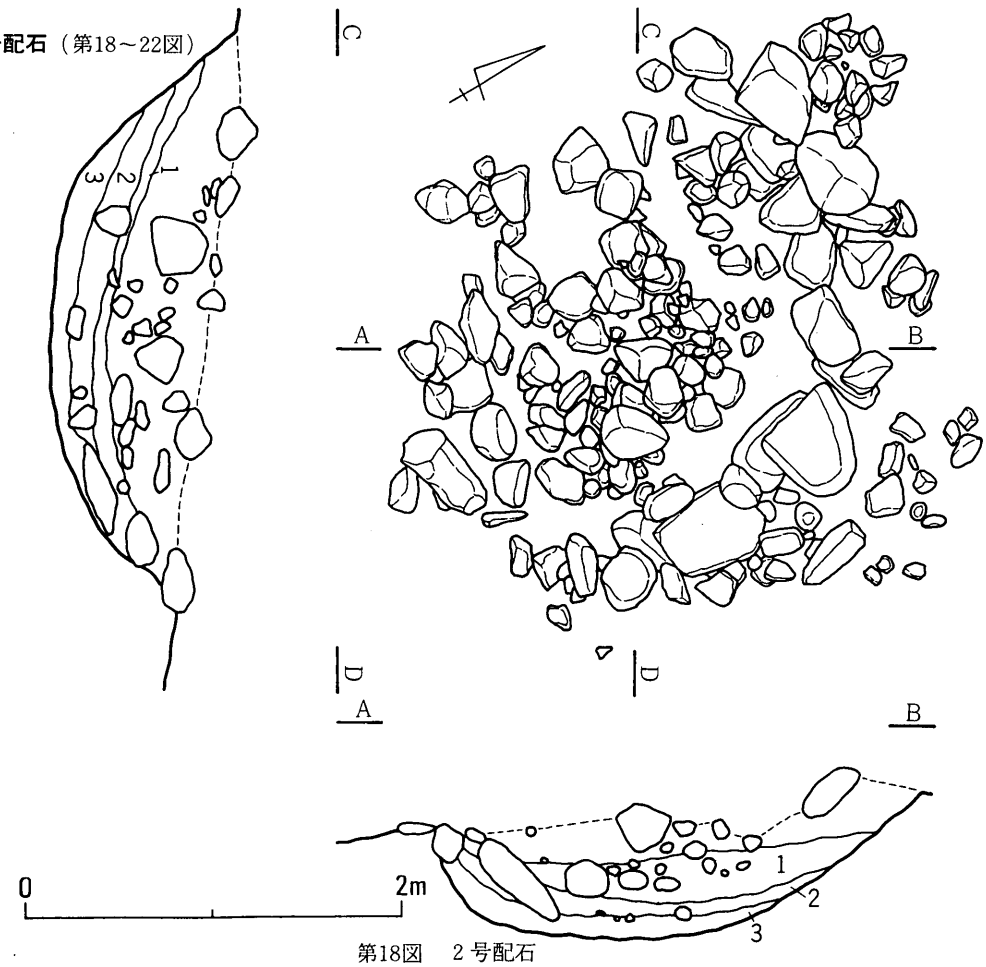
時期　伴出遺物より，平安時代中～後期，11世紀後半～12世紀にかけての所産と考えられる。



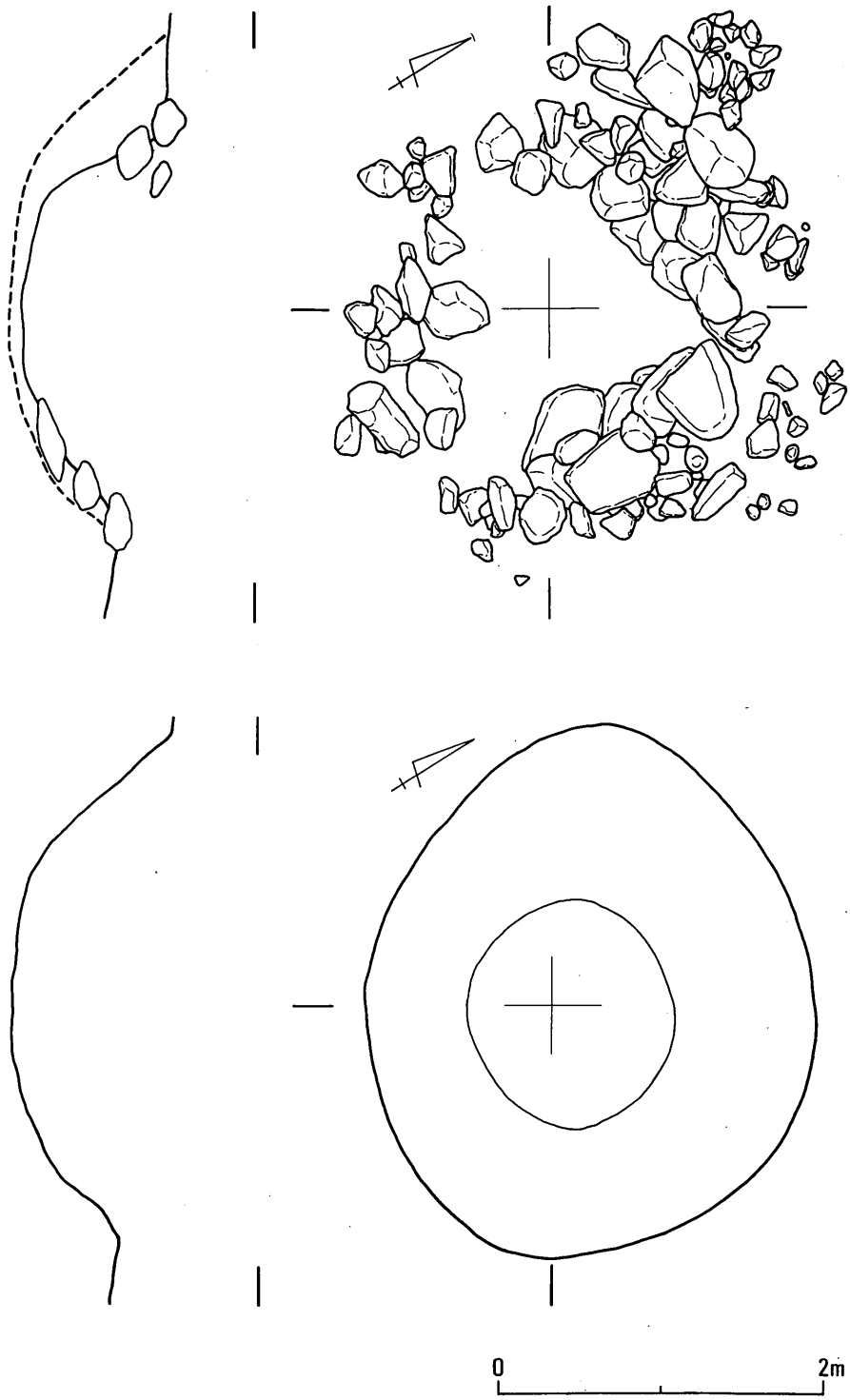
第17図　1号配石出土土器(1：4)

(百瀬)

2号配石（第18～22図）



第18図　2号配石



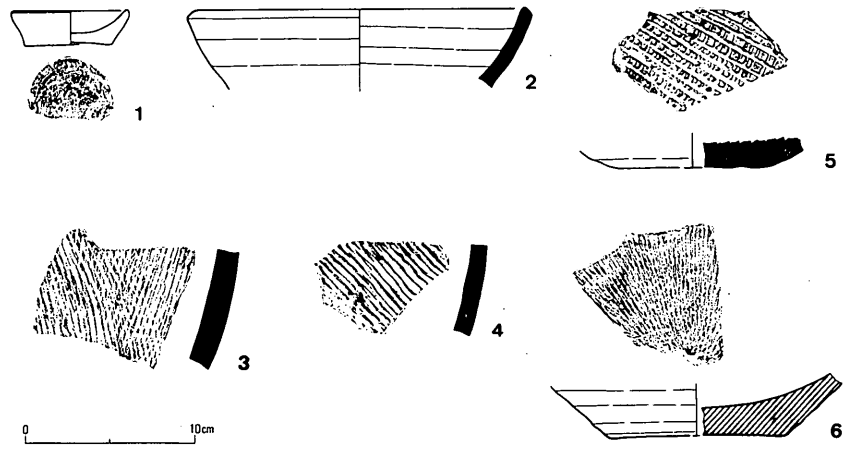
第19図　2号配石・配石部および掘り方

遺構(第18・19図)　発掘区中央北端部にあたる11K・Lグリッドを中心に検出された。確認面は第II層直下，第III層上面である。南西側にはやや間隔をおいてピット群が存在する。規模は長軸を北西－南東方向にもつ，長径300cm，短径250cmの不整楕円形を呈する。長径330cm，短径280cm，深さ70～100cmの不整円形を呈し，断面がゆるやかな鍋底状を呈する掘り方内に構築されており，30～50cm大の比較的扁平な自然石を内側をそろえて積み上げている。石のすき間や掘り方との間には裏込めと思われる10～20cm大の石がつめられていた。全体に北西から南東にやや下がる自然地形にそって傾斜をもち，その比高差は80cmほどをはかる。内部の覆土は3層に分かれる。第1層　暗茶褐色土（しまりやや弱，粘性ふつう)，第2層　細かい砂礫を含む暗茶褐色土（しまりやや弱，粘性やや強)，第3層　炭化物粒を含む茶褐色土（しまりやや硬，粘性ふつう）である。覆土中には確認面および第1層を中心として10cm前後の石が多数遺存していた。

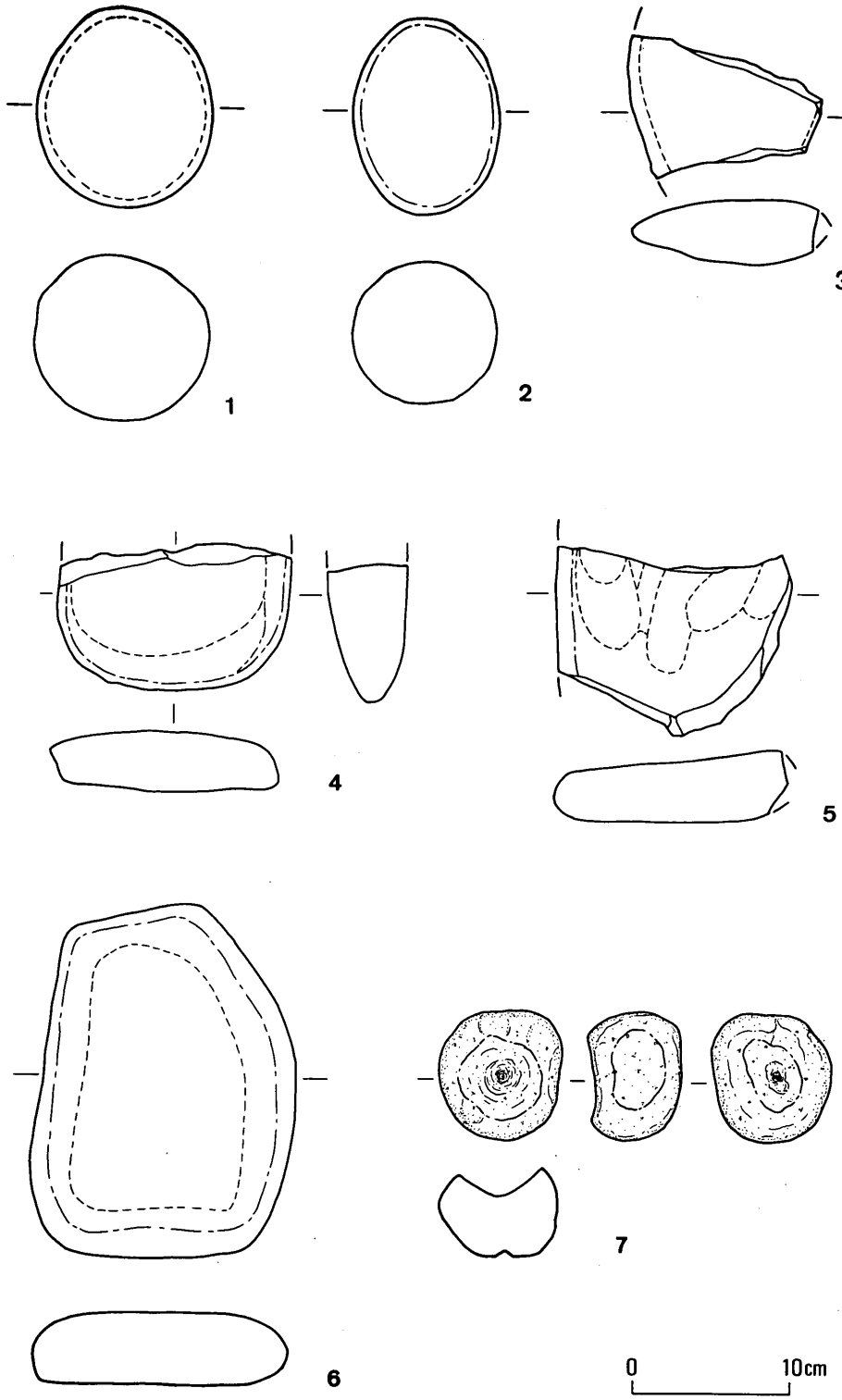
（小磯）

出土遺物　土器(第20図)　覆土中より土師器小皿1点，須恵器椀1点，須恵器甕2点，おろし皿1点，擂鉢1点が出土している。1は覆土下部から出土した土師器小皿である。口3・4は須恵器甕，5はおろし皿である。灰釉が施釉されており，いわゆる中世瀬戸窯系の製品ではないかと思われる。6は擂鉢の底部破片であり，内面に14歯を単位とする櫛目が規則的に施される。

石器(第21・22図)　計11点の石器が出土している。1・2は球状の石製品。ほぼ全面に磨痕が認められる。3～6は両面に磨痕をもつ大形石製品および大形礫である。3・4は周囲を成形して形を整えている。7・8は人為的な凹痕をもつ石製品であり，1・2とセットをなすものと考えられる。7は裏面にもわずかな凹痕が認められる。9～11は鉢形を呈すると考えられる大形の石製品であり，口径は推定30～34cmをはかる。外面の整形はやや粗いものの，内面は比較的ていねいな調整が行われている。本址より検出されたこれらの石器に対する名称につい



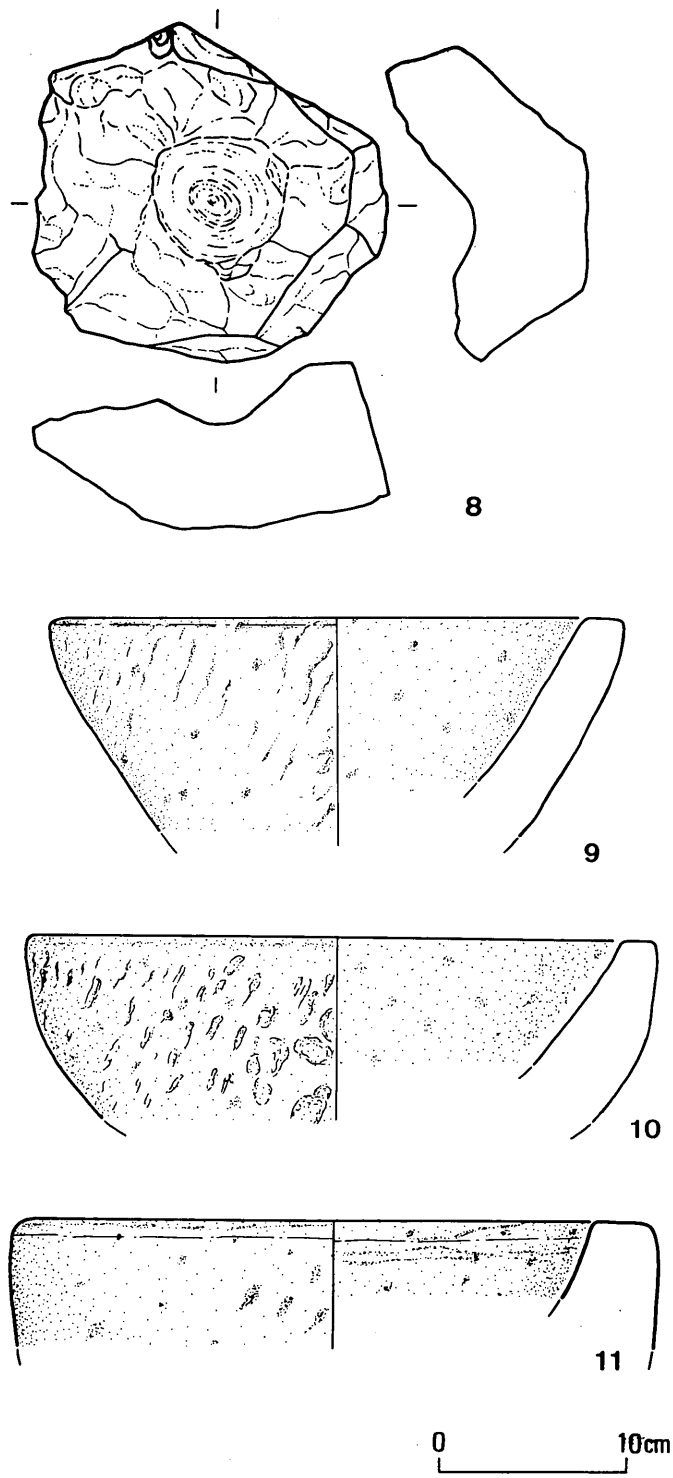
第20図　2号配石出土土器



第21図　２号配石出土石器(1)（１：４，１・２のみ１：２）

ては，その機能や用途とともに問題を残しているが，ここでは各石器の形態的な特徴の提示にとどめ，具体的な内容については機会を改めたい。

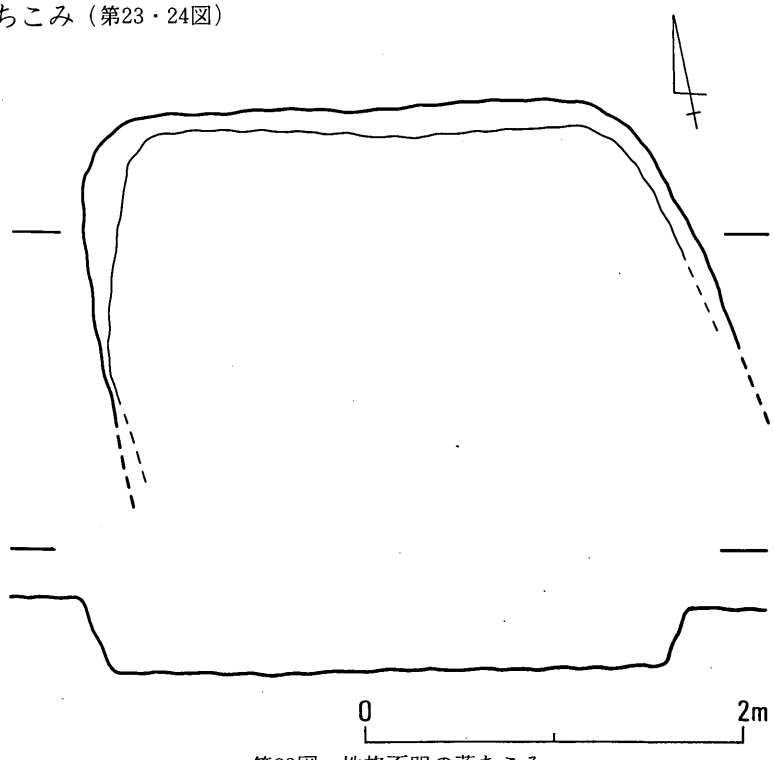
（百瀬）



第22図　2号配石出土石器(2)（1：4）

4．性格不明の落ちこみ（第23・24図）

遺構(第23図)　発掘区南東部にあたる6R・Sグリッドに位置する。西側および北西側にはそれぞれ2～3mほど離れて4号土壙・5号土壙が検出されている。南側は砂礫層中に存在するため明瞭なプランを検出することができなかったが，規模はおおむね径300～330cmの不整方形を呈するものと考えられる。深さは18～20cmをはかり，壁は比較的急傾斜で立ちあがっている。底面は比較的平坦であるものの，きわめて軟弱であり，10～20cm大の自然石を多数のせている。当初，確認面より灰釉陶器（長頸壺）を含む多数の土師器が出土し，住居址の可能性を含めて注意されたが，発掘によっては本址の全体的な性格を明らかにすることは困難であった。

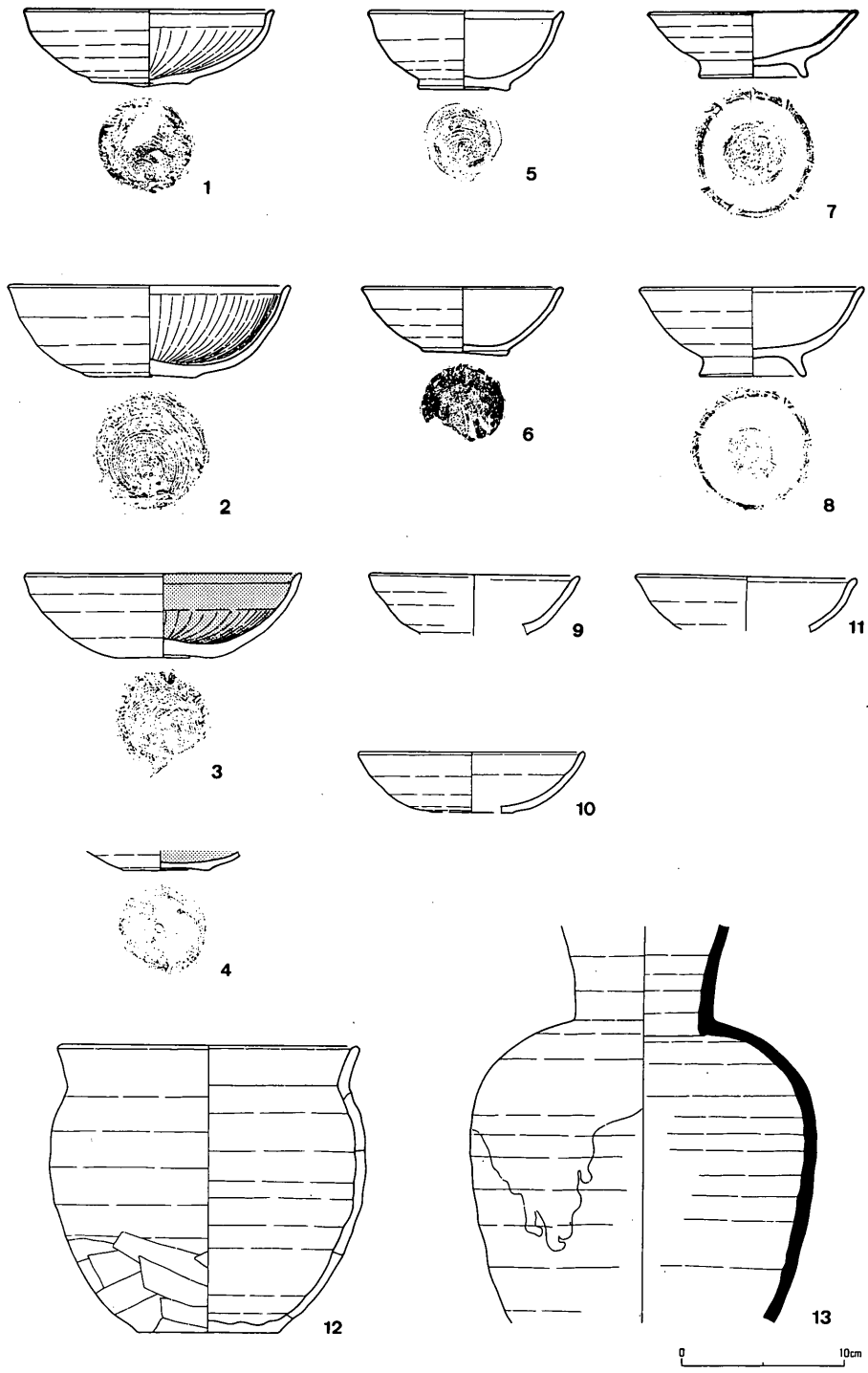


第23図　性格不明の落ちこみ

出土遺物(第24図)　確認面より，土師器坏11点，土師器甕1点，灰釉陶器長頸壺1点が検出された。1～4は口径15～18cmほどをはかる比較的大形の土師器坏である。内面は下部を中心として暗文風の放射状研磨が行われ，3と4は内面黒色を呈する。5・6は口径12cmほどと比較的小形の土師器坏であり，内面は横位を中心とした研磨が加えられる。5は底部が低い高台状を呈している。7・8は高台のつく土師器坏である。口径は7が推定13.2cm，8が推定14.1cm，器高はそれぞれ4.1cm，5.5cmをはかる。外面はロクロ痕をとどめるものの，内面はやや粗い研磨が行われる。12は器高17.8cmをはかる比較的小形の土師器甕である。粘土紐巻き上げ後，回転ロクロ成形を行い，さらに器外面胴部下半に横位から斜位のヘラケズリ整形を施している。13は長頸壺と考えられる灰釉陶器である。二段構成で，胴部と接合される口頸部はほぼ垂直に立ちあがり，やや外傾ぎみに開く。

時期　伴出遺物より平安時代中頃，10世紀後半～11世紀にかけての所産と考えられる。

（百瀬）



第24図　性格不明の落ちこみ出土土器

第３節　遺構外出土遺物

１　縄文時代の遺物（第25・26図）

１）土器（第25図）

発掘区の中央から西側にかけて７点の縄文土器が出土している。

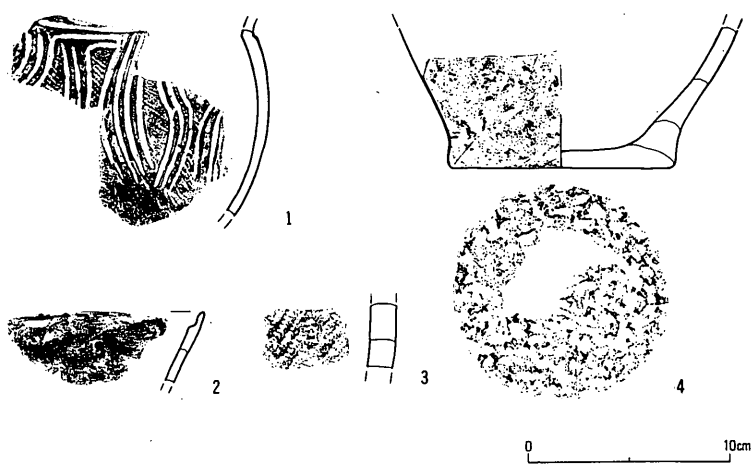
１は地文に縄文が施される甕形土器の胴部破片である。頸部に数条の沈線がめぐり，胴部には多条の沈線によって弧状の文様が描かれる。沈線間は研磨が加えられて縄文が磨消される。地文は原体LRの縄文を縦方向に施文している。色調は外面がくすんだ褐色ないし茶褐色，内面黒みをおびた灰褐色を呈する。器厚は５～７㎜と薄手。胎土は砂粒・長石・白色不透明粒子などを含むものの，比較的堅くしまる。器面は外面を中心にていねいな研磨が行われ，比較的平滑である。縄文時代後期前半堀之内式の新しい段階に比定される。

２は甕形土器の口縁部破片。内面の口縁上部に，円形沈刻文を囲むように１条の沈線がめぐる。外面黒みをおびた灰褐色，内面黒褐色を呈し，器面は横方向を中心に研磨が行われる。器厚は４～５㎜と薄手のつくりであり，胎土に砂粒・長石・白色不透明粒子などを含む。焼成は比較的堅緻。縄文時代後期前半堀之内式に比定される。

３は原体RLの縄文が施される胴部破片である。時期は中期～後期のものと考えられる。

４は時期不明の底部破片。底径11.5cm，器厚８㎜をはかる。外面赤みをおびた茶褐色，内面くすんだ茶褐色を呈し，胎土に砂粒・石英・長石・白色不透明粒子を含む。底面に「２本越え・１本潜り・１本送り」の網状痕を有する。

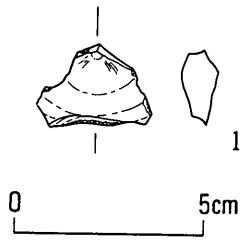
図示したもののほかに，中期後半に属する小把手が１点出土している。　（百瀬）



第25図　遺構外出土土器(1)（１：３）

2）石器（第26図1）

細かな剥離痕のある黒曜石が1点検出された。縦長剥片の頭部破片であり，下端部に微細な剥離が認められる。二次的な加工ないしは使用による歯こぼれと考えられるが，使用痕などは観察できず疑問の余地を残している。

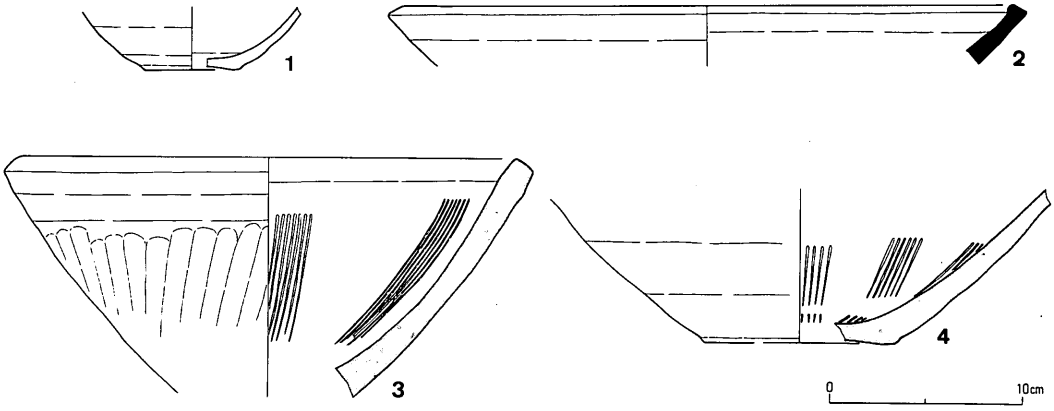


第26図　遺構外出土石器（1：2）

2．平安時代の遺物（第27～29図）

1）土器（第27図）

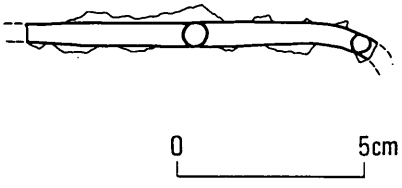
土師器坏1点，中世陶器と思われる鉢1点，須恵器擂鉢2点のほか，外面に叩き目のある須恵器片などの小片が多数出土している。1は内外面にナデ調整が施された土師器坏の底部破片。2はロクロ成形による鉢。3・4は擂鉢であり，3は8歯，4は6歯の櫛目がそれぞれ内面に施される。3は推定口径27.7cmをはかる。



第27図　遺構外出土土器(2)（1：4）

2）石器・石製品

発掘区東端部附近の表土層中より，五輪塔の一部が検出されている。



第28図　遺構外出土鉄製品（1：2）

3）鉄製品（第28図）

棒状の鉄製品が1点検出された。現存長9.3cm，径6.5mmをはかる。

4）銭貨（第29図）

8Tグリッドより，「熙寧通宝」が検出された　（百瀬）

第29図　遺構外出土銭貨（2：3）

第4節　小　括

以上，鐘山遺跡に対する今回の発掘調査により検出された遺構と遺物について，個別的・基本的な説明を行ってきた。本来ならば，より統一的な視野にたってそれらの総括的な把握を試み，遺構や遺物の背後にある歴史的な意義について考察を加えるべきところであるが，今回は時間的な制約もあり，整理中に到達しえたいくつかの問題点を提示するにとどめたい。

1．遺構について

くり返し述べてきた通り，総面積660㎡あまりをはかる今回の調査では，土壙5基・ピット群1・配石遺構2基・性格不明の落ちこみ1基が検出された。これら各種の遺構は大きく東西に分かれて存在しており，2つのまとまりを形成していることが理解される。発掘区北西側に位置し，1～3号土壙，ピット群，1・2号配石からなる1群と，発掘区南東寄りに位置し，4・5号土壙，性格不明な落ち込みからなる1群とがそれであり，両者は直線にして7ｍほどの間隔を保って存在している。さらに，各遺構はその占地を異にするのみならず，遺構そのものの属性を大きく異にしている。とりわけ，北西側の一群の中にあってやや孤立的なあり方を示す2号配石は，その呼称の妥当性はさておき，特異な存在として注目される。大形の自然石をほぼ楕円形に積み上げており，一種の組み石状を呈している。伴出遺物により，平安時代後葉11世紀後半から12世紀にかけての所産であると判断されたが，その性格については不明な部分を多く残している。発掘の時点では池ないし水利施設の一部とも考えられたが，他に類例を知らない現時点においては速断は避けたい。他の遺構についてもその性格は一切不明であるものの，先にも触れたように，発掘区ないしその付近に寺院が存在したという伝承があることから，寺院に伴う遺構群である可能性も否定しえない。ただし，伴出遺物のあり方からすれば，出土した北西側の1群と南東寄りの1群とは若干の時間差をもっていることが予想され，注意される。

2．遺物について

今回の調査によって出土した遺物は，おおむね平安時代に属するものであった。土師器坏，同甕，同小皿をはじめ須恵器，長頸壺と推定される灰釉陶器などの土器類とともに，砥石，鉄製品，銭貨がそれぞれ検出されたことは先の説明の通りである。ここでは土師器を中心とする土器類について若干の補足を試みたい。

長野県下における土師器をめぐる研究は，今日，一応の編年的基準が確立し，各地域ごとのよりミクロな様相とともに，その背後にある文化的・社会的・経済的な動向が明らかにされつつあるといえる。そうした一連の研究のなかで，本遺跡が存在する東・北信地方について扱ったものとしては，笹沢（笹沢　1976）や川上（川上　1978）の論攷などが提出されている。笹沢は善光寺平における土師器を関東地方の編年を援用しつつ5様式に細分し，善光寺平第1様式

を4世紀代に，同第2様式を5世紀代，同第3様式を6世紀から7世紀代，さらに，8世紀代の奈良時代を同第4様式，8世紀末から12世紀にかけての平安時代を同第5様式にそれぞれ対比させている。一方，川上は笹沢と基本的には同様の編年観・年代観に立ち，千曲川水系における平安時代終末期から中世にかけての〝土師系土器〟に焦点をあてて，〝土師系土器〟の去就を論じている。

本遺跡から検出された土師器はおおむね，両氏のいう第5様式に含まれるものであり，器種構成などにやや不明瞭な部分を残すものの，その中でも比較的新しい段階に属するものと考えられる。ただし，発掘区西側に位置するピット群や1・2号配石などから出土した1群と，発掘区南東寄りに位置する性格不明の落ちこみを中心に出土した1群とはその様相を異にしており，注目される。特に，土師器坏に限ってみるならば，第12図1・2に代表される前者は比較的小形で内外面ともにロクロナデをとどめるのに対し，第24図1～11に代表される後者は前者に比べ比較的大形のものを含み，外面はロクロナデをとどめるものの，内面は放射状ないし横方向のていねいな研磨が行われる。本書では両者にみられるこうした法量および，整形手法における精粗の差異を昭間差としてとらえ，前者を11世紀後半～12世紀に，後者を10世紀後半～11世紀に比定した。こうした年代観に対して，ピット群を中心に前者の分布と重なるように検出された銭貨類は，多少の時間幅を内包するものの，時間的な指標のひとつとなりうるものとして注意される。

以上のような遺構・遺物のあり方は，本遺跡から検出された遺構群が10世紀から12世紀にかけて若干の時間的なズレをもちながら相次いで構築されたことを強く示唆するものといえよう。

今後は周辺部の調査とともに文献資料などとの接近が必要であり，そうした方向性の中から概期における地域的な歴史の一端が明らかにされてゆくことが大いに期待される。

参考文献

1976　笹沢　浩　「善光寺平第5様式の土師器とその生産」　上水郡誌歴史編

1978　川上　元　「土師器什器の展開と終焉」　『中部高地の考古学』長野県考古学会

1981　長野県教育委員会・日本道路公団名古屋建設局　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――原村・その4――昭和51・52年度』

1983　松本市教育委員会・長野県中信土地改良事務所　『松本市寿小赤遺跡――緊急発掘調査報告書』

1983　長野市教育委員会・長野市遺跡調査会　『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』

第4章　結　　語

鐘山遺跡は鳥居川により形成された深い谷間の狭小な段丘上にある。この遺跡の調査と成果については本論に述べているように、発見された遺構は土壙、ピット群、配石址である。住居址がなく土壙や配石等の存在は、集落の中心から外れた外郭の諸施設、特殊な場所ではないかと推測される。遺物は土器、石器、鉄製品、銭貨等である。これを時期的に分ければ、縄文時代と平安時代に大別される。この現象をよくみた場合、北信濃の山間地域の山裾や河成段丘上のどの遺跡にもみられるあり方と一致している。即ち縄文時代の前期頃より人間生活の舞台が繰広がり、いくつかの足跡を残しつつ断続的に今日に至っている。特に、縄文時代中・後期、古墳時代の終りから平安時代の活況さが特徴的なのである。

調査を終えてつくづく感じ問題にしたいと思うことは、発見された遺構や遺物を当時の具体的な人間生活に関係づけ、生活の様態を再現させることである。鳥居川を利用し、段丘上に生きた人々、郷や庄園を成立させ、寺院を建立した時代背景、これらは三水村の重要な研究課題であろう。しかしいまだ未解決といっていいだろう。三水村は太田郷、太田庄、芋川庄等関係した地域である。また普光寺の存在も気になるところである。これを当鐘山遺跡とどう関係づけ、研究成果をどう組立ててこの未解決の分野に迫りうるか、しかし今のところ他の遺跡の実状も不明確であり、今まで発見された資料の検討や体系化もなされていない今日扱うには無理のところがある。今後遂次調査研究を進めながら成果の累積が必要なのである。

本論でも触れているように、発掘された資料は「これらを関係づけるに（寺院と）否定するものではない」とされている。寺院の当否は別として、平安時代の遺構、遺物の存在は事実である。今日のところの事実を重大なものとして考えていくものとしたい。

この調査は調査主任百瀬忠幸君がほとんど独力で行い、発掘から遺物整理、報告書の作成に昼夜を分たず努力されたことを明記するとともに三水村当局の暖かい理解と協力により本報告書が完成したのである。深謝する次第である。

（岩　佐　今朝人）

鐘山遺跡出土平安時代遺物一覧表 （土器）

ピット群

No.	図版No.	器種	法量 (cm) 口径 底径 器高	器形の特徴	整形の特徴	1．胎土 2．色調 3．焼成 4．残存	備考
1	12－1	土師器 坏	12.0 5.6 3.7	体部は丸味をもって立ち上がり，口縁部は外反	ロクロ成形 底部＝回転糸切り	1 砂粒を多く含む 2 暗肌色，黒灰色部多い 3 良 4 ⅔	
2	－2	土師器 坏	11.4 5.4 3.7	体部は丸味をもって立ち上がり，口縁部は外反	ロクロ成形 底部＝回転糸切り後周辺部ナデ	1 砂粒・金雲母を含む 2 赤肌色，一部白茶色 3 良 4 完形	
3	－3	土師器 皿	(12.2) (7.5) 3.0	体部は直線的に開く	ロクロ成形 底部＝回転糸切り	1 砂粒・金雲母を含む 2 白茶色 3 良 4 ⅙	
4	－4	土師器 小皿	7.8 4.9 1.8	体部はほぼ直線的に開く	ロクロ成形 底部＝回転糸切り後周辺部ナデ	1 砂粒・金雲母を含む 2 肌色，一部淡紅色 3 良 4 ⅚	
5	－5	土師器 小皿	7.7 5.0 2.0	体部は外面は丸味をもって立ち上がるが内面は直線的体部下位が直立し，高台状をなす	ロクロ成形 底部＝回転糸切り	1 砂粒・金雲母を含む 2 白茶色，一部黒褐色 3 良 4 略完形	
6	－6	土師器 小皿	6.9 5.5 1.8	体部は急傾斜で開く	ロクロ成形 底部＝回転糸切り	1 砂粒と微量の金雲母を含む 2 淡肌色 3 良 4 ⅚	口唇部に一部ススの付着がみられる
7	－7	土師器 小皿	(7.0) (4.2) 1.8	口縁部がわずかに内彎	ロクロ成形 底部＝回転糸切り後ナデ	1 砂粒・金雲母を含む 2 赤肌色 3 良 4 ⅓	口唇部にスス付着
8	－8	土師器 甕	—— (6.2)	底部片	ロクロ成形　ナデ 底部＝回転糸切り後周辺部ナデ 底部内面に一部ハケ目	1 砂粒を含む 2 内面＝白茶色，外面＝褐色 3 良 4 底部⅓	
9	－9	土師器 甕		胴部片	内面＝ナデ 外面＝斜位の叩き目文	1 砂粒を多く含む 2 明褐色 3 良 4 胴部下半⅕	
10	－10	須恵器 甕		胴部片	内面＝ナデ 外面＝平行叩き目文	1 砂粒を多く含む 2 暗青灰色 3 良 4 不明	

1号配石

11	17－1	土師器 甕	17.8 8.9 18.3	胴部上位に最大径をもつ 口縁部は直線的に開く	ロクロ成形 下位⅓ヘラケズリ（下→上）	1 砂粒多く含む 2 肌色，一部赤茶色 3 良 4 略完形	

2号配石

12	20－1	土師器 小皿	7.1 5.3 2.1	体部は急傾斜で開くが，内面は傾斜がゆるやかである	ロクロ成形 底部＝回転糸切り	1 砂粒を多く含む 2 暗肌色，一部暗灰色 3 良 4 ¾	
13	－2	須恵器 椀	(20.6) —— ——	口縁部片	ロクロ成形	1 砂粒含む 2 内面＝黒灰色，外面＝暗灰色 3 良 4 口縁部⅛	
14	－3	須恵器 甕		胴部片	内面＝ナデ 外面＝斜位の叩き目文	1 砂粒多く含む 2 暗灰色 3 良 4 不明	

No.	図版No.	器種	法量 口径 底径 器高 (cm)	器形の特徴	整形の特徴	1．胎土 2．色調 3．焼成 4．残存	備考
15	20－4	須恵器 甕		胴部片	内面＝ナデ 外面＝平行叩き目文	1 砂粒多く含む 2 灰色 3 良 4 不明	
16	－5	おろし皿	—— (9.0) ——	内面に格子状の刻線をもつ	ロクロ成形 底部＝回転糸切り後周辺部ナデ 外面＝灰釉施釉	1 砂粒を微量含む 2 白灰色 3 良 4 底部½	
17	－6	擂 鉢	—— (10.5) ——	体部は直線的に開く 内面全体に14歯の櫛目が放射状に施される	ロクロ成形 底部＝回転糸切り後周辺部ナデ	1 砂粒を含む 2 茶色 3 良 4 底部⅙	

性格不明の落ちこみ

18	24－1	土師器 坏	(15.6) 6.1 4.8	体部は丸味をもって立ち上がり，口縁部はわずかに外反 口径に比し，やや器高が低い	ロクロ成形 内面＝放射状のヘラミガキ 口縁部は横位のミガキ 底部＝回転糸切り後周辺部ナデ	1 砂粒・金雲母含む 2 淡赤肌色，内面は黒色部多い 3 良好 4 ⅔	
19	－2	土師器 坏	(17.7) 6.9 5.7	体部は丸味をもって立ち上がる 口縁部はわずかに外反	ロクロ成形 底部＝回転糸切り後周辺部ナデ 内面＝放射状のヘラミガキ 口縁部はヨコミガキ	1 砂粒・金雲母を含む 2 白茶色，一部灰褐色 3 良 4 ⅔	
20	－3	土師器 坏	(17.2) 6.0 5.3	体部は丸味をもって立ち上がる 口縁部はわずかに外反	ロクロ成形 底部＝回転糸切り後周辺部ナデ 内面＝上半は横位のミガキ 下半は放射状のミガキ	1 金雲母を多く含む 2 内面＝黒色，外面＝暗肌色 3 良 4 ½	
21	－4	土師器 坏	—— 5.3 ——	底部片	ロクロ成形 底部＝糸切り 内面＝ミガキ	1 砂粒多く含む 2 内面＝黒色，名面＝淡茶色 3 良 4 底部のみ	
22	－5	土師器 坏	12.2 5.8 4.9	体部は丸味をもって立ち上がり，口縁部は外反 口縁部内側に稜を持つ	ロクロ成形 底部＝回転糸切り，高台貼り付け後周辺部ナデ 内面＝ミガキ	1 砂粒を若干含む 2 内面=明茶色，外面=淡赤肌色 3 良 4 ¾	
23	－6	土師器 坏	(12.7) 5.4 4.2	体部は丸味をもって立ち上がる 口縁部はわずかに外反	ロクロ成形 底部＝回転糸切り後周辺部ナデ 内面＝ミガキ	1 砂粒・金雲母を微量含む 2 灰茶褐色，一部黒褐色 3 良 4 ⅔	
24	－7	土師器 坏	(13.2) 9.6 4.1	体部は直線的に開く	ロクロ成形 底部＝高台貼り付け後全面ナデ 内部＝ミガキ	1 砂粒・金雲母を含む 2 暗肌色，内面は黒灰色部多い 3 良 4 ⅝	
25	－8	土師器 坏	(14.1) 6.7 5.5	体部は丸味をもって立ち上がる 口縁部はほぼ直線的	ロクロ成形 底部＝高台貼り付け後全面ナデ 内面＝ミガキ	1 砂粒・金雲母をわずかに含む 2 淡紅肌色 3 良 4 ⅓	
26	－9	土師器 坏	(13.2) —— ——	体部はわずかに丸味をもって立ち上がる	ロクロ成形 内面＝ミガキ	1 砂粒・金雲母を若干含む 2 白茶色，一部淡紅色 3 良 4 ⅓	
27	－10	土師器 坏	(14.2) (5.2) 3.7	体部は丸味をもって立ち上がる	ロクロ成形 底部＝糸切り後周辺部ナデ 内面＝ミガキ	1 砂粒・金雲母を多く含む 2 淡茶色，口縁部は濃茶色 3 良 4 ⅙	
28	－11	土師器 坏	(13.8) —— ——	体部は丸味をもって立ち上がる 口縁部は外反	ロクロ成形	1 砂粒・金雲母を含む 2 白茶色 3 良 4 ⅕	
29	－12	土師器 甕	(18.8) 8.8 17.8	胴部上位に最大径をもつ 口縁部は直線的に開く	ロクロ成形 外面＝ヨコナデ，下位⅓へラケズリ（左→右） 底部＝へラケズリ	1 砂粒多く含む 2 内面=暗褐色，外面=淡紅肌色 3 良 4 ⅓	巻きあげ技法により成形
30	－13	灰釉陶器 長頸壺(?)		頸部は垂直に立ち上がった後外開する 胴部上部に最大径をもつ	ロクロ成形 口頸部を接合する二段構成 外面に灰釉を施す 一部濃緑色を示す	1 砂粒を含む 2 灰色 3 良 4 ¼	

遺構外

No.	図版No.	器種	法量 口径 底径 器高 (cm)	器形の特徴	整形の特徴	1．胎土 2．色調 3．焼成 4．残存	備考
31	27－1	土師器 坏	―― (5.0) ――	体部～底部片	ロクロ成形 底部＝回転糸切り	1 砂粒を微量含む 2 肌色 3 良 4 底部1/4	
32	－2	鉢	(33.7) ―― ――	口縁部片	ロクロ成形	1 砂粒を多く含む 2 灰色 3 良 4 口縁部1/6以下	
33	－3	擂鉢	(27.7) ―― ――	体部は丸味をもって立ち上がる 内面に7歯の櫛目が放射状に施される	ロクロ成形 外面＝縦位のナデ	1 砂粒を名く含む 2 黒灰色 3 良 4 1/6以下	
34	－4	擂鉢	―― (10.2) ――	体部は丸味をもって立ち上がる 内面の6歯の櫛目が2段に施される	内・外面＝ナデ	1 砂粒を多く含む 2 暗灰色 3 良 4 1/6以下	

鐘山遺跡出土石器一覧表

1号土壙

No.	図版No.	製品名	現存計測地 長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	遺存状態	石質	備考
1	第8図1	砥石	(18.8)	10.5	9.8	3,110	略完形		3面使用

ピット群

2	第14図1	砥石	(8.8)	3.2	3.2	90	略完形		4面使用
3	第 図2	砥石	(8.6)	3.8	4.3	120	略完形		4面使用
4	第 図3	砥石	5.7	2.6	2.5	60	完形		4面使用
5	第 図4	砥石	(7.8)	4.2	2.2	110	略完形		4面使用
6	第 図5	砥石	5.0	4.7	3.3	70	略完形		5面使用

2号配石

7	第21図1	球状石製品	6.1	5.6	4.9	230	完形		
8	第 図2	球状石製品	6.0	4.6	4.2	140	完形		
9	第 図3	磨痕ある大形礫	(8.5)	(12.2)	3.9	420			
10	第 図4	磨痕ある大形礫	(4.5)	7.4	2.5	900			
11	第 図5	磨痕ある大形礫	(5.2)	15.0	4.2	1,220			
12	第 図6	磨痕ある大形礫	11.0	8.2	2.3	3,290	完形		
13	第 図7	石製品	8.2	7.5	5.2	380	完形		人為的凹痕をもつ
14	第22図8	石製品	18.4	16.5	7.9	2,930	完形		人為的凹痕をもつ
15	第 図9	鉢形石製品	30.2	——	(10.4)	700	破片		
16	第 図10	鉢形石製品	33.2	——	(9.6)	620	破片		
17	第 図11	鉢形石製品	34.0	——	(6.8)	650	破片		

注：15～17の計測値は，口径・底径・器高(各cm)・重さ(g)である。

遺構外

18	第26図1	剝片	2.0	3.0	9.0			黒曜石	

鐘山遺跡出土鉄製品一覧表

遺構外

No.	図版No.	製　品　名	長さ(mm)	径　(mm)	備　　考
1	28－1	―――	93	6.5	

鐘山遺跡出土銭貨一覧表

ピット群

No.	図版　No.	銭　　名	年　代	長　体	破損度	径(mm)	備　考
1	15－1	皇宋通宝	1039	楷　長	―――	2.45	
2	－2	皇宋通宝	1039	楷　書	微　小	2.4	磨滅
3	－3	元祐通宝	1086	行　書	微　小	2.35	磨滅
4	－4	聖宋通宝	1101	篆　書	―――	2.35	
5	－5	聖宋通宝	1101	篆　書	微　少	2.35	
6	－6	永楽通宝	1408	楷　書	微　小	2.4	
7		―――			大　破		

遺構外

8	29－1	熙寧通宝	1068	楷　書	微　小	2.25	

図　　版

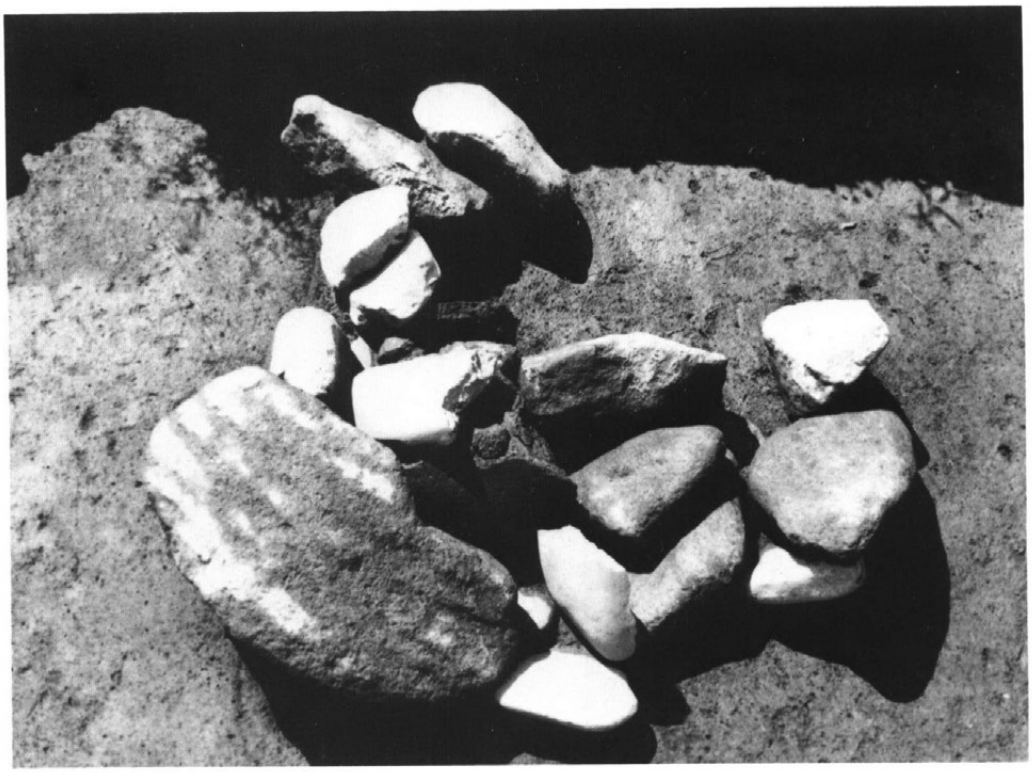
図版 1　鐘山遺跡の空撮

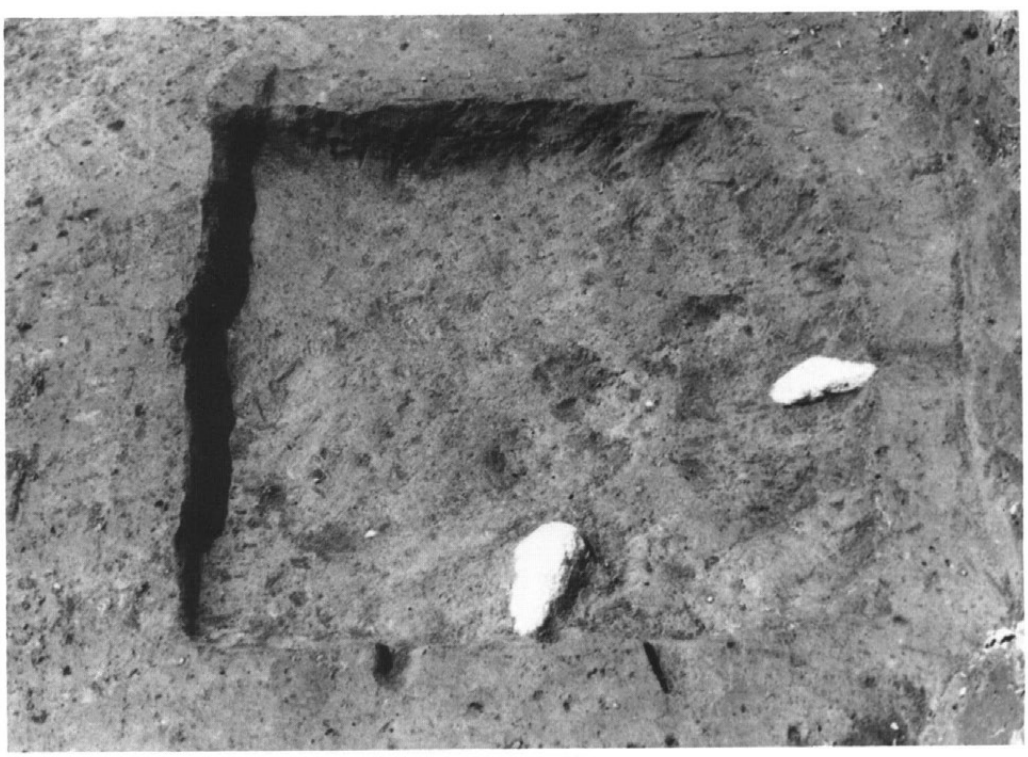
図版2

鐘山遺跡（上：遠景 南から、下：近景 北から）

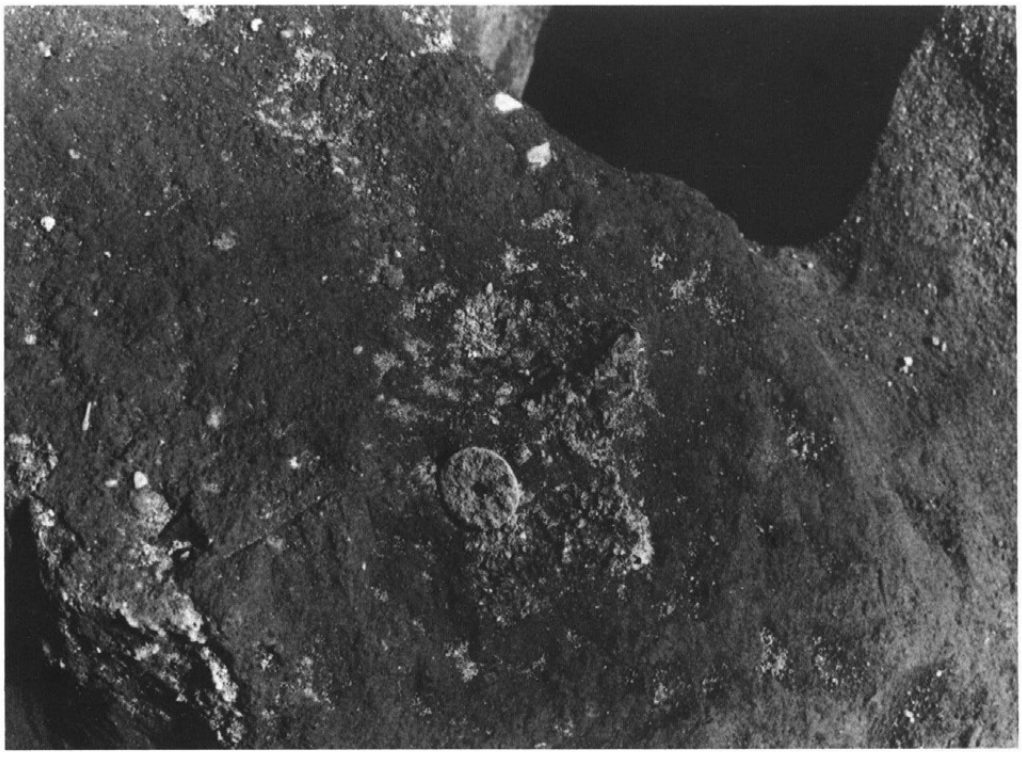
1～3号土壙及びピット群（上：北から、下：西から）

図版4





4　号　土　壙



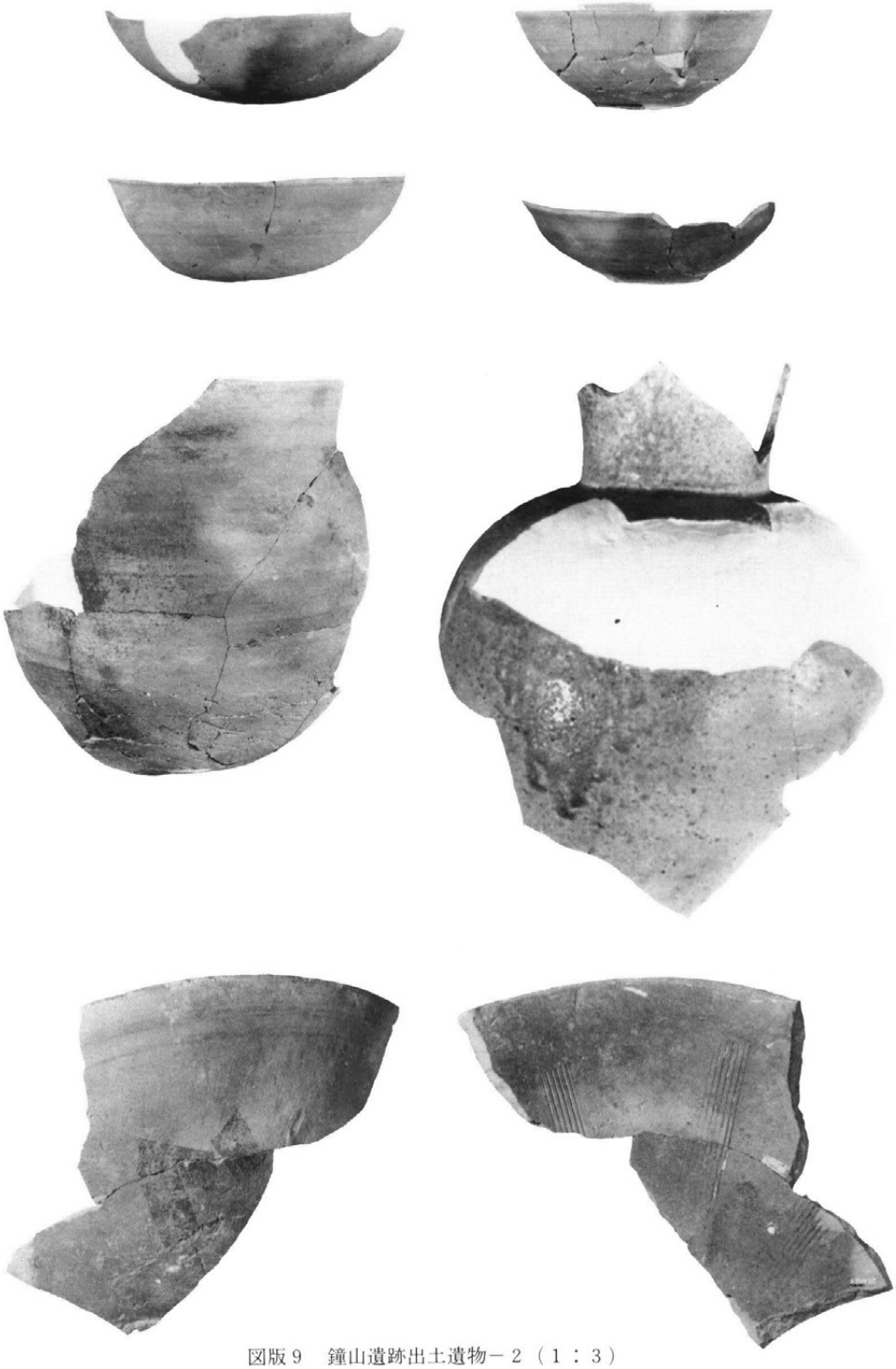
上：炭化米・銭貨出土状態、下：1号配石

図版6

2　号　配　石

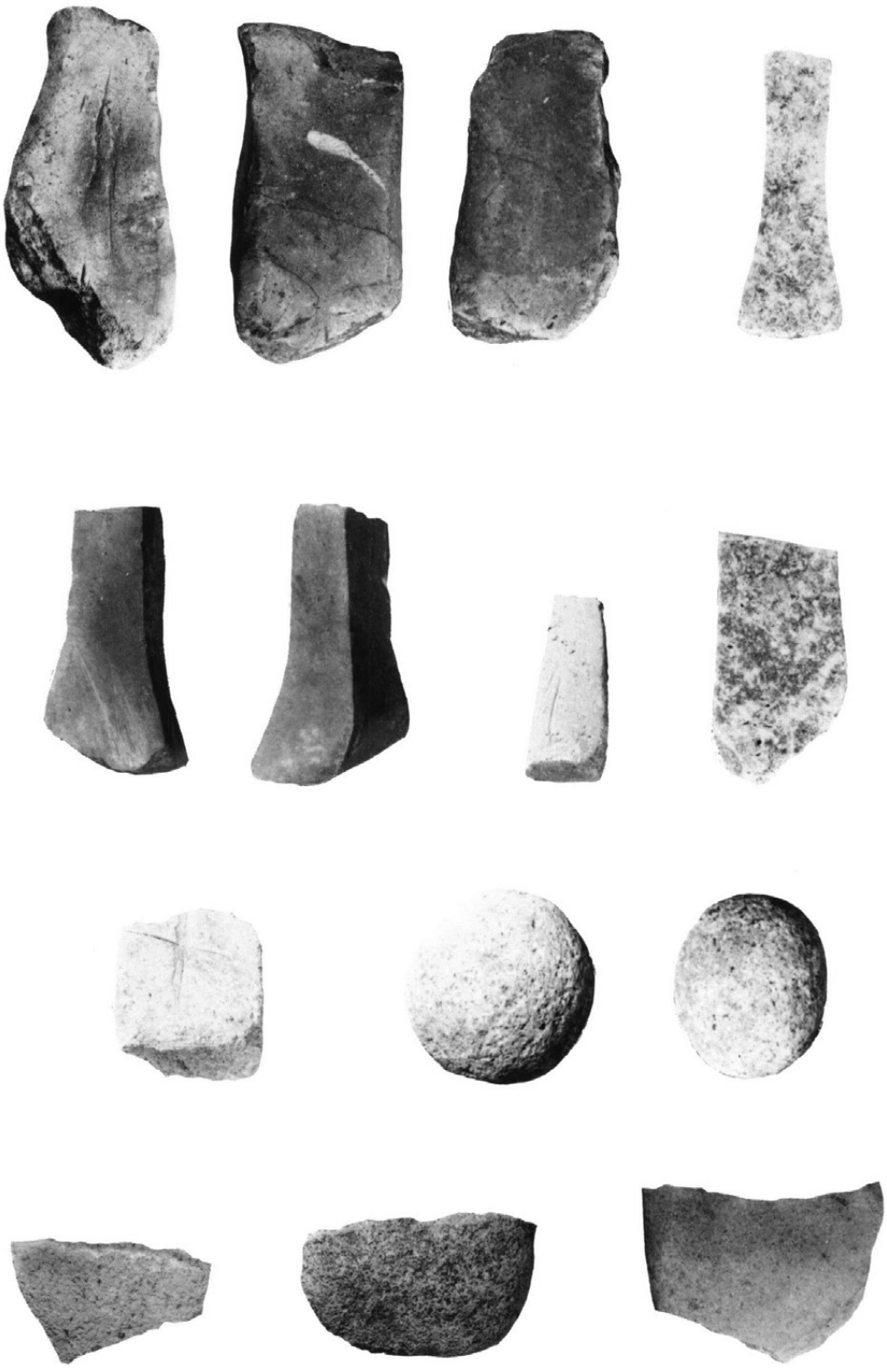
2　号　配　石

図版8　鐘山遺跡出土遺物－1（1：3，4～6・12は1：2）

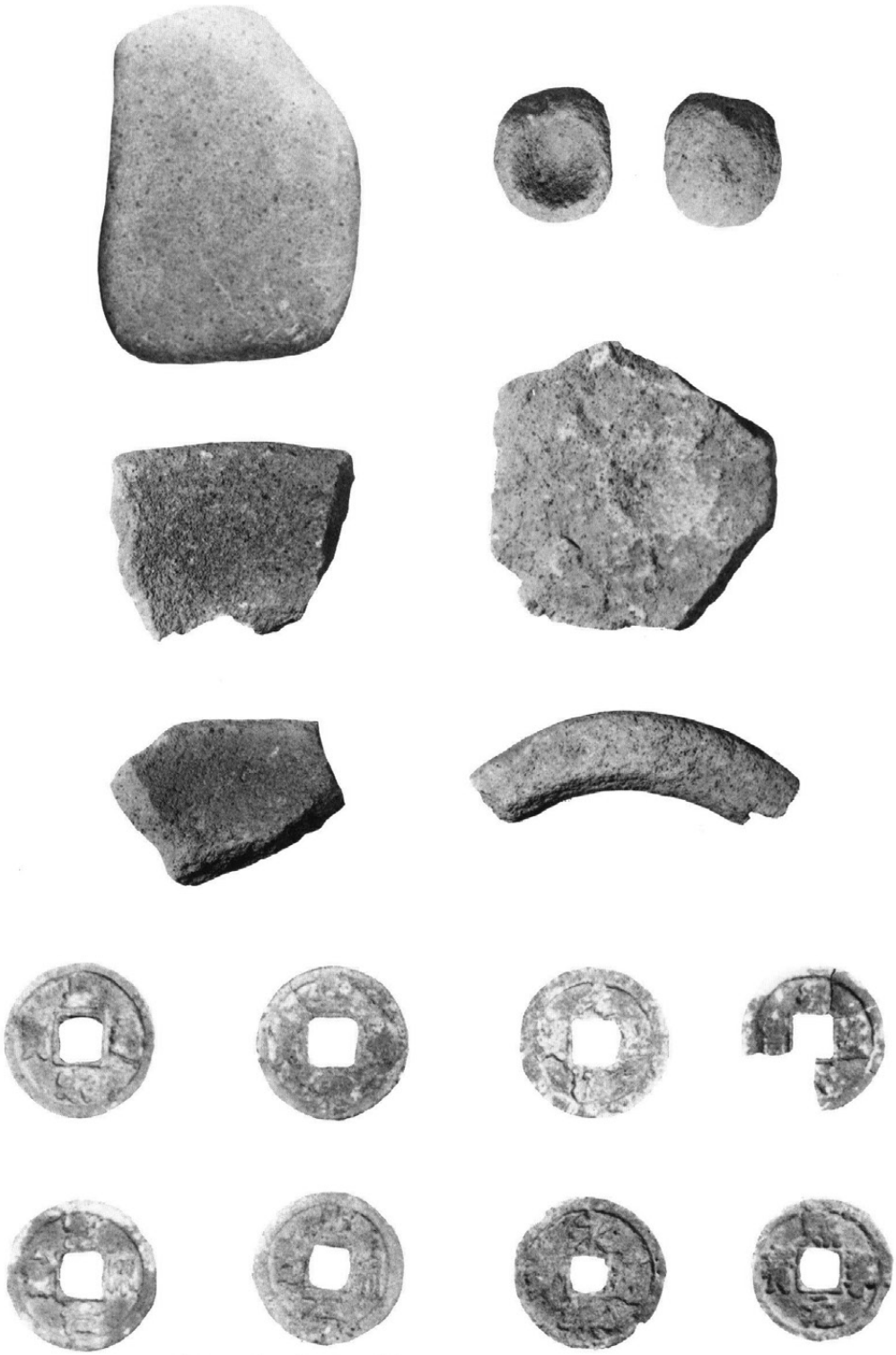


図版９　鐘山遺跡出土遺物－２（１：３）

図版10



図版10　鐘山遺跡出土遺物－３（１：４，２～８は１：２）



図版11　鐘山遺跡出土遺物－4（1：4，銭貨は1：1）

図版12

図版12　上：調査風景，下：調査団員

三水村遺跡発掘調査報告書　第1集

鐘　山　遺　跡

—緊急発掘調査報告書—

印刷　1984 年　3　月　25　日

発行　1984 年　3　月　31　日

編集　三 水 村 教 育 委 員 会

発行　鐘山遺跡発掘調査会

印刷　ほおずき書籍株式会社